

---

# 東方否意狼

目だま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方否意狼

### 【NZコード】

N7842N

### 【作者名】

目だま

### 【あらすじ】

さてさて、これは一人の少年が歩む奇妙な物語。

不慮の事故を発端に過去 それも人類が生まれるよりもはるか昔へ。原因不明予測不能。第一の生はよりもよつて人間ですらない真っ黒な獣。

一体、彼はどうなつていいくか、どんな物語を歩んでいくのか

それは、神以外、与り知らぬ話でござります。

タイトル変更。旧タイトル『東方妖狼紀』、現在のタイトルは『とうほういなおおかみ』とお読み下さい。

## 注意

- ・これは『上海アリス幻樂団』によるゲーム『東方project』の一次創作です。
- ・東方キャラの設定は基本的に一次設定です。
- ・一度リメイクしました。設定が変わっているので注意して下さい。
- ・一度リメイクしました。設定が変わっているので注意して下さい。  
今度はまともだと良いなあ（願望）
- ・この作品は作者の勢いとノリと思いつきで構成されています。
- ・主人公は強キャラです。でもオリキャラはバグキャラです。そしてその内の一人（？）は最強です。
- ・オリキャラが出ます。むしろ最初はオリキャラしかいません。最初は東方の皮を被つた何かです。

以上の点に気を付け、用法、用量を守り正しくお読みください。

## 再びなプロローグ（前書き）

皆様、お久しぶりで御座います。曰だまです。  
此度、黒歴史と言つても良い今作を、一から書き直すことを勝手に  
決意しました。本当に申し訳有りません。

変更点としましては、シナリオの大幅な書き換え、あるキャラの出  
番がの増加、オリキャラ複数追加、時系列の変更、細々とした設定  
の変更、etc etc。

そして物語の序盤が東方の皮を被つた何かに・・・・・。  
コラボ企画に参加してゐるのに何やつてんだと思いますが、しばらく  
は最優先で更新させていただきます。本当に申し訳有りません。

## 再びなプロローグ

人は孤独を嫌う。痛みを嫌がる。死を恐れる。

それは当然だと思う。

ありがちな事を言えば、どんな人でも一人では生きていけない。別に、食べ物がどうこうとかそのではなく、単純に一人では何れ壊れてしまうと言う意味で。直接的でなくとも、ネットでもゲームでも何でも構わないが、人と繋がっていようとする。それはある意味本能だと思う。知らない土地で一人で迷子になると不安になるとか、そんな感じ。

死や痛みははもつと単純だ。

死は未知だ。誰にも分からない。人にとって、未知とは何よりも恐ろしい。故に、好奇心はその未知を既知に変えようとする。そして、痛みはその先に死を連想させる。

ならば、人との繋がりを、世界との繋がりすらも消し、痛みを十分に感じ、死に至ってしまった俺は、狂わずにいられるのだろうか。

「それで、俺はどうなるんですか？」

「何か落ち着いてないか？」

「厨」な独白したら落ち着きました

俺がそう言つと、俺の前に立つ大男は溜め息を吐いて呆れた様な目を向けてくる。

「珍しいな、お前。こう言つ事になつたら、何か変な叫び声上げて喜ぶか、泣きながら発狂するかのどっちかなんだが……」

いや、それどっちも変わらないと思つ。発狂は喜びの余りだらう。

「で、詳しい説明してもらえますか？ 閻魔様」

何故俺が閻魔と名乗る大男と対談をしていたのか、それを説明するために俺の体感時間で数時間前まで遡ろう。

いつもの様に母親に叩き起こされ、両親と朝食を食い、迎えに来た友人一人と平凡な公立高校へ行き、いつもの様に恙無く授業を受けたその帰り道の事だ。

「あー、もう学校嫌だ。引き籠もつて二一トしたい……」

思いつきり猫背で、あからさまにだれでますと言つ感じで歩く俺。

「あ、そう言えば、永夜抄どうだつた？」

その俺の隣を歩く友人兼幼馴染  
流瀬宗一。背が高い、イケメン、頭が良い、一級フラグ建築士、鈍感と言つ何処の主人公？と聞きたくなる様な奴。たまに主人公補正が付いてるんじやないかと

本気で疑つてしまつ。でも俺なんか目じゃない程のオタク。と言つ  
か俺にそつち関係を仕込んだ奴。俗に言う残念なイケメン。なのに  
人気。イケメンつてずるい。

「無理。ノーマルで死んだ」

「相変わらずゲーム下手だな」

余計なお世話だこの野郎。今回のはちゃんとイーデーはクリアした  
んだぞーーー！

「下手の横好き」

言い返せない自分が憎い。

「永夜抄って何ですか？」

そつ言つて口を挟むのは高校になつて宗一の奴が面白そうだからつ  
て言つ理由で俺に引き合わせた隣のクラスの女子。名前は……ごめ  
んまだ覚えてないや。蛙と蛇の髪飾り付けてて、近所…………いや  
隣町だつけ？まあそこら辺の神社で巫女かなんかやつてるらしい。  
そもそも家の事情とかであんまり学校に出てこないから俺は宗一越  
しにしか接点が無いのだ。

「東方Projectって言つて、なんだっけ上海アリス幻樂団？  
がしてるゲームの事だよ」

「お前にじては良く覚えてたな。簡単に言えば、敵が撃つてくる弾  
幕を避ける弾幕シューティングゲームって言つジャンルの同人ゲー  
ムだ。漫画とかもあるけどな」

「はあ・・・・・・・つまりインベーダーゲームみたいな物なんですね」

その一言に宗一が固まつた。取り敢えず、ご愁傷様。

「じゃあ、俺先に帰るから」

「おひ。君はちよつといひでO HANASHIしようか」

「え、え？ 私何か言いました？ ちよ、流瀬君！？ 肩、肩痛いですつて！」

ああなつた宗一はそう簡単には止まらない。まあ、運がよければ一時間程度で開放されるだろう。俺の時は家だつて所為で夜まで行つたからなあ……。

「まつ、でも良いだろ」

俺の長年の地味キャラのカンがアイツは宗一に惚れていると告げているし、一緒にいれるのは悪い事じゃないだろ。そんな事考えながら、二人をおいて信号が青になつたのを確認し、交差点を渡る。

「ゴシャッ！」

俺はこの時、初めて人の肉が潰れる音を聞いた。あまりにも突然過ぎて訳が分からぬが、その音が自分から発せられた事は理解できた。視界が定まらず天と地を交互に与す。地面に何度もバウンドして、ようやく止まつたと思つた次は信じられない程の激痛。痛すぎて何処が痛いのかが分からぬ。息が苦しい。叫ぼうとしても声が

出ない。

（ああ、名前、覚えとけば良かった……）

瞼を閉じた訳でもないのに暗くなつていぐ視界の中で、最後に思ったのはそんな事だった。

「ど、ここまでは覚えています」

「……お前、よくそこまで覚えてたな」

何処まで覚えている?と聞かれたので、多分死ぬ間際の感触や感覚までも鮮明に語つたら閻魔様にドン引きされた。

閻魔様曰く、信号無視をした2トントラックが俺に激突。「ミミ肩の様に宙を舞い、地面に叩き付けられたそうだ。その時の俺の姿は、脳漿は飛び出し内蔵は破裂し、骨は砕け皮膚を突き破り大量に出血しているスプラッタ映画も真つ青な死体だつたそうな。確かにそんな中で意識を保つていた俺すげえ……。

「で、別にそれが閻魔様の所為とか、そんなテンプレは無いんでしょ?」

「ああ。他の神は暇潰しひで勝手に殺す様な事例もあるが、お前は違つ。アレは純然たる事故だ」

つて言つた、そんなテンプレ本当にあるのか……。小説の中だけだと思つていた。

「奴ら、俺になんの断りも無く勝手にやつて俺には後始末だけやらせやがる……！！特にゼウスだあのジジイ！！今年に入つてもう三回目だぞー！？地獄に叩き落してやるうかあの無能めーー！」

閻魔様はストレス社会に生きているらしい。と言うか、ゼウス何やつてんの？神話でも色々やらかしてたのは知つてるけど、現代でも？

「最近じやあのスキマが神隠しまでやつてるしよお…………やっぱあそここの担当が映姫だけつてのはきつかったか…………」

「は、はあ…………？」

えつと……スキマ？神隠し？確かに最近行方不明者が出でたのは知つてるけど、何故その二つの単語が出てくる。え？あるの？幻想郷あるの？

「つと、話が反れたな。まあ、お前の死自体に問題は無い。問題は死んだ後だ」

尋ねたい事は山ほどあるが、どうせ死んだんだから関係無いと割り切ろう。

ああ、でも宗一の奴は幻想入りとかしそうだな。それを追つてあの子も、……つとリア充爆発しろーーー何か空しい。鬱だ死のう……あ、俺もう死んだんだ。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

百面相している俺を閻魔様が心配してくれる。顔怖いけど、良い人だ閻魔様。

「ならいいが……单刀直入に言つた。お前はこの世界の輪廻から外れた」

「へーそうで……す……か?」

おい、今何て言つたこの人。

「原因はお前にあつた何らかの能力の暴走。恐らくだが、比較的近い平行世界に転生する事になるだろ?」

「ハア!?」

俺に能力!?.そんな物発動したためしがないぞ!..

「時間が無くなってきた。質問は一切認めん。お前の今世の記憶はそのままにしておく。俺も出来づる限りを尽くして探してやるが、どんな世界でも頑張つて生きろ」

「ちよ、何言つて

「時間だ」

余りの急展開に付いていけなくなつた俺は閻魔様にもつと詳しい事を聞こうとするが、閻魔様の一言で光に包まれ、意識が遠退いて行く。

次に目が覚めた時には、  
鬱蒼と生い茂る森の中にいましたと。)

## 狼の新しい命と生活

アルーヒ、モリノナー・カー、イヌサーンニ、デアーッタ。

「いや、さすがにこれは……」

あ、ありのまま今起こつた事を話すぜ！－！

『閻魔様とのドキドキ死後対談の後、目を覚ますと森の中にいた』

な、何を言つてゐるのか、わからねーと思うが俺にもわからねー。  
これだけでも十分に恐ろしいのに、さらにもう一つ。

取り敢えず、ジッとしても仕方が無いと思つて立とうとしたら立  
てなかつた。仕方なく四つん這いで歩いたんだが、妙に歩きやすい。  
まあ、いいかと森の中を歩き続けると大きな川を見つけた。物凄く  
綺麗な川だ。今時こんな川もあるんだなーと感心しながら、喉の渴  
きを潤すために川を覗き込んだら、そこに『写つていていたのは、俺の顔  
じやなく真つ黒な目つきの悪い犬っぽい何かの顔が映りこんでいた。

「何ぞこれ……」

リアルに頭がどうにかなりそうだ……。

何度も瞬きしても、後ろを振り返つても見ても、『写つていてるのは俺の  
顔ではなく犬の顔だ。いや、そもそも何故気付かなかつた。

視線をすぐ下に向ければ、見えるのは肌色の見慣れた手ではなく獸  
っぽい真つ黒の毛に覆われた前足。顔を後に向ければ、同じく真つ  
黒な毛に覆われた胴体に後ろ足、更に尻尾。……あ、自分で動かせ  
る。

つまり、俺は人ではなく犬（？）として生を受けた、と

正直、何でいきなり成体なのかとか、犬の体なの**じ**で**じ**つやつて声出  
してるんだろうつ、など疑問は残さないが、今は  
。

思いつさり叫ぼう。

取り敢えず、今の現状を確認すると、この森の中には人のにおいが全くしない。むしろ獣臭い。つまり、俺はこれから野性の中で生きていかなければならん訳だ。

川からせせじ離れていない森の中、前足の爪で顔をポリポリと搔きながら歎む。

我ながらシーリーな画だと思ふが  
語も居ないんだ  
気はする必要  
は無い。

体に異常は無いどころかむしろ感覚的なスペックが上がっている。嗅覚は言うに及ばず、味覚、更には気配察知まで出来る様に。視界が狭まつていないので一番の謎だが、まあ、得をしたと考えておこう。

を持つ事が出来ないのは不便だが、その内考えれば良いだろつ。

「問題は、飯だよな……」

こちどいら今時の普通の高校生だ。狩りのやり方なんか……いや、知らない事も無いけど、動物の狩りは知らない。だが案ずる事無かれ。

ここで何故この体が既に成体程の大きさなのか、と言つ疑問に着目しそう。

普通に転生すれば、恐らくは幼い状態のはずだ。だが、俺は成体。つまり、今の状態は俗に言つ憑依状態であり、上手くいけば体の持ち主の知識を使えるかもしない、と。人間、追い込まれれば考えが浮かぶものだと我ながら感心した。一次創作読んでよかつた！？じやないと憑依なんて知らなかつたし。

教えてくれた宗一に今日この時だけ感謝しつつ、目を閉じる。

闇の中に落ちていく様な、夢を見ている様な感覚の中、集中力を出来うる限り引き出し、記憶を探つていく。

そんな中で、頭に思い浮かぶ事が一つ、全く意識していないにも拘らず、口から出ていた。

「『肯定と否定を操る程度の能力』……『畏れを抱かせる程度の能力』……つて」

また 東 方 か ！！

「ハツ・・・・・・！？」

思わず心中で叫んだ所為で集中力が切れてしまった。

この内のどつちかが闇魔様の言つていた輪廻から外れた理由だろつ。て言つたか、能力二つってありえるのか？宗一、取り敢えず電波でも

良いからお前の見解を聞かせろ……って、そんな事はどうでも良い。今の問題は、結局狩りの方法が分から無かつたと言つ事だが……。

「まあ、こぞとなれば木の実でも食うか

と言つ事で結論を出した。

「何とかなるわ」

良い言葉だ。

「寿命つて、何なんだろうな……」

『んなもん、こつちが知りたいッスよ。何年生きてんスか?』

「……五十年?」

『大将、もしかして狼じやなかつたりしません?』

「俺が知りたいよ」

俺がこの森 正確には山に来て早五十年、結構なんとなる  
もんだと証明された。

この山、木は多くせに食える木の実が異様に少ない。最初の方は我慢していたがすぐに飢えてしまい、近くに居た小鹿を、殺した。初めて、自分の牙で。テレビでやっていた動物の狩りを思い出して、見よう見ま似で、自らの牙で相手の首の皮を衝き破り、肉を断ち骨を碎いた。

正直、今でも得物を殺す感覚は苦手だ。肉も決して美味しいとは思えない。それでも、今まで全て食つてきた、決して残さない様に。自己満足の感情論だったが、まあ、やらないよりはマシだと思つている。

その間、当然俺自身が狙われた事もあったが、それでも約五十年、生き抜いた。その内この森の主として扱われてきたが、それが大体十年前の話だ。

今、俺が住処としているのは頂上付近にある岩で出来た穴倉。因みに、あの時の川はこの穴倉から真っ直ぐ下つた麓にある。

そして、穴倉で寝転んでいる俺の顔のすぐ側に居る奴に目を向ける。

『?・どうかしたんスか大将』

「……いや、何でもない」

俺の視線に気付き、こつちに顔を向けてくるリス  
名をクルミ。名前は女の物だが、性別はオス（確めた訳じやないが、多分そうだろう）。何故か俺の言葉を理解し、俺の事を大将と呼ぶ訳の分からん奴だ。ついでに、ずっと犬だと思つていた俺に狼だと教えた奴もある。

こいつと会つたのは数ヶ月前、十数年の研究により使用法が判明した『畏れを抱かせる程度の能力』を使い、狩りをしていると、何故か俺に『俺を大将の僕にしてくれ！』<sup>しかも</sup>と言つてきた。本当に訳が分からん。

『そう言えれば、大将。例の『肯定と否定を操る程度の能力』つてのは使えたんスか?』

「……まだ」

『大将にも出来ない事つてあるんスねえ……』

しみじみと言うクルミ。お前は俺を何だと思っているんだ。ただのしがない狼に何を期待してるんだよ、お前は。

話は変わるが、さつきも言った通り、『畏れを抱かせる程度の能力』の方はある程度分かつていて。使い方は簡単、相手に敵意を持つばいい。それだけで、自分より格下の相手は俺を恐怖し、畏れる。自分と同等か、それ以上の相手には真正面からは効かないが、隙を突いたり、一瞬でも恐怖を覚えさせれば、発動可能だ。能力による畏れは相手の身を縛り付け、例え逃げたとしてもその畏れはその身に刻まれ続ける。と言うか、最初から意識せずにつけていたらしい。まあ、そうでもない限り、素人が最初から狩りに成功する訳が無いのだけど。『ぬら孫』の様な事が出来ないのは残念だが、狩りの時には大助かりだ。

それに対し、『肯定と否定を操る程度の能力』は全く分からん。効果も、使用方法も未だに研究中だ。

そして、最近気にしているのが

。

『狼つて、五十年も生きるつけ?』

と言う事だ。

さつきのクルミとの会話もそこに繋がる。

運動機能の低下も、感覚の衰えも全く無い。つまり、まだまだ老いていないのだ。五十年でまだ老いない?そんな狼いるかツ!…と言ふ話である。

俺ですら、最近まで自分が狼である事を知らなかつたのだ。なんとも言い様が無い、と言う事で考えても仕方ない事は保留。

「……腹減つたな」

考え事を終えると、空腹を感じたためのつそりと起き上がり、身を震わせる。

『お供するツスよ、大将』

『そう言いながら俺の首元に上つてくるクルニ。僕つて言つなら俺の上に乗るのはおかしくないか?と、毎回思つてゐるのだが、まあ、別に良いか、とも毎回思い、放つてゐる。』

『今日は何が出るツスかね』

『それこそ運だろ。得物を選び好みなんて出来ないんだから』

『まあ、そうツスけどね』

『後、俺が狩りしてゐる間にお前も餌探ししてこい』

『さつ氣なく俺の心配までしてくれるんスねーそこに痺れる憧れるう!!』

『お前、本当にリスか?俺と同じ境遇の人間だと言われても信じるが。』

『でも大丈夫ツス。木の実は大将の巣に貯蔵してゐるツスから』

『いつの間に……』

『リスト舐めんなッス』

と、こんな会話を最高速で山を駆け下りながらしているのだが、そんな中で平然と俺の背に乗つていられる「イツは本当に何なんだろう、と思わぬもない。

既に山から出て林に入っている。近くにいる狙い田の獲物の群れは……三つか。

『相変わらず嗅覚おかしいッスよね』

「これぐらには普通だろ」

『普通の狼は嗅覚だけで林の中の全てを把握しないッス』

そんなもんぢやないか?と首を傾げるも、俺以外の狼になんて会つた事が無いし、便利である事は変わりないから問題ないと自己完結し、近くにいた三つの群れの内の一つへと足を向ける。

『今日は何にしたんスか?』

「多分子鹿だな。まあ、そこまで食えてる訳ぢやないし、小さくていい

『おいだけで判断できるのは普通なんスかね……』

「知るか。取り敢えず氣配隠せ」

『了解ッス』

「コイツ、何だかんだ言つてハイスペックだから困る。俺の見よう見真似の癖に野生動物すら騙す程氣配の隠し方が上手くなつていて。俺も出来る様になるまで半年以上掛かったのに……。手頃な木の下で立ち止まり。

「舌噛むなよ」

思いつ切り跳ぶ。

そして木の半ばにある枝に着地、また別の木の枝に飛び移り、着地すればまた別の木の枝へ、と繰り返し、獲物の狙いややすい場所を探す。

「……こら辺かな……？」

ちょうど真下に鹿の群が集まっている場所を見つけたので、そこで止まり様子を窺う。

『……やっぱ大将普通じゃないッスよ。普通の狼は木と木の間を飛び回らないッス』

……クルミ、俺も少しおかしいと思つてゐから言つた。

「取り敢えず、『ゴー！』

乗っている木の枝を蹴り、地面に 狙つてゐる子鹿に弾丸の様に跳ぶ。このやり方は意識して『畏れを抱かせる程度の能力』を

狙つてゐる子鹿に弾丸の

使い出す前に始めた。そもそも、従来の方法じゃ成功率が低いのだ。鹿などの草食獣の視界はほぼ全方向。そのため、肉食獣は基本的に群で、更に弱い獲物を狙うのだが、生憎と俺は一人だ。つまり、狩りが上手くいかない。そこで、俺は体のスペックをフルに使い、木の上から襲う奇襲作戦を考え、実行。

それ程のスペックがあれば普通に追い掛けても捕まえられるんじゃないかと思うだろう。確かに、追い付けはする。たが、追い付けても急激な方向転換される上に、そもそもハンデがあり、捕まえられない。今でも、余程切羽詰まつた状況じゃない限り、これを使っている。

グシャリッ

!!

「ん……？」

仕留めた小鹿を咥えて、ゆっくりと歩いていると、珍しい、狼になつて初めて嗅いだにおに気づいた。

『どうしたんスか大将。小鹿じや足りないって今頃気付いたんスか？大体、大将でかいんだからそれぐらいじや』

まあ、確かに俺はデカイ。人なら一、三人は乗せて走れるんじやないかと思うが、自分の食つ量ぐらいはしっかりと分かっている。まあ、

アレだ。分からぬ奴は『も のけ姫』のモロ 君の真っ黒になつた奴を想像すれば良い。尻尾は一本だがな……つて、話がずれたな。これもクルミの所為だ。

『痛い、痛いッスよ！－ちよ、大将の尻尾は下手すりや木も切り倒すんスから、そんなもんで俺を突かないで！－』

腹いせになんか最近妙に長くなつた、俺の全長と同じぐらいの尻尾でクルミを突きまくり、ある程度満足したので本当の用件を話す。

「……妙なもんを見付けた」

『へ？ みょんなもん、 ッスか？』

「つっこまない。つっこまないぞ、俺は。

「まあ、行けば分かるか……」

『Let's go!』

……もう無理だ。何で英語知つてんだよ！－何で発音がネイティブなんだよ！－お前ホントは俺と同じ転生者だろ！－……いや、違うのは分かつてゐるんだけどな。取り敢えず、つっこんで気が済んだので、においのする方へ向おう。

はあ……、何でこんなに疲れるんだろうつ。



## 狼と人外達（前書き）

取り敢えず、人の形になれる所までは連続投稿したい日だまです。  
今回は前よりも出番が増えるあの人との登場。

青天の霹靂 確か、酷く驚くとか、そんな感じの意味だつたと思う。いきなり何を言い出すんだと思うだろうが、今の俺を表す言葉が正しくそんな感じだ。

『何なんスかねー、これ』

地面に落ちているモノの周りをクルミが突つつきながらうろちょろしているが、そんな事はどうでもいい。問題は落ちているモノだ。特徴的な自在に物を掴むための手、退化し短くなつた爪、体を被つているのは毛ではなく白く柔らかそうな布、頭部からのみ生えている長い毛、僅かに見える肌は日に当たつてないのでないかと思う程白い。それはつまり。

「……人間だ」

『ニンゲン……ツスか?』

そう、落ちている……と言うか、倒れているのは人なのだ。しかも子供。身長は推定だが、百三十程度だろう。うつ伏せに倒れている所為で顔は分からぬが、地面に広がつている金髪（日本人じゃねえ）の長さ 足元ぐらいまで から、十中八九、女の子。上質な白い布を重ねて形を整えた様な服（イメージとしては古代ヨーロッパ）に靴は皮製のサンダル。一体何処の時代から飛び出して来たんだろうか、この子は……。

そもそも、どうやってここまで来たんだ、この子。俺はあの山を中心としたかなり広い範囲を繩張りとしている。それこそ、最初は人がいないものかと探索を繰り返した物だ。それでも、人は見つけら

れなかつた。だが、この子はここにいる。服やサンダルに特に汚れは無い。この位置から俺の縄張りの外に出るまで、普通の人間の速さなら半日は掛かるだろう。そんな距離を、こんな子供が歩いて、靴にも服にも汚れが無い?……余りにも不自然すぎるな。

「取り敢えず、連れて帰るか

一度、口の小鹿を放し、今度は地面に倒れている子の服の襟の辺りを咥え、軽く放つて背中に乗せ、再び小鹿を咥える。

『連れて帰るつて……喰うんスか?』

「喰つかアホ

そこまで腹が減つてないから小鹿を捕らえたんだろうが。目を覚まして、話が聞ければ御の字。そもそも、言葉が通じるかどうかが問題だが……。

「まあ、何とかなるだろ」

いざとなれば後を付けて人里探す事も出来るし、と楽観的にも程がある事を考えながら、住処へ歩き出した俺が、言葉とかその思惑が根本的に意味を為さない事が分かったのは、この子が起きてからの事だった。

結局、その子が目を覚ましたのは、俺が先程捕らえた小鹿をむしゃむしゃとよく考えたらこれはこれでかなりのスプラッシュなんじゃないかと、ここ五十年で結構な頻度で思う、ある意味いつも通りの食事を終え、一眠り（NEETさい）した後の、もうすぐ日が暮れると言う逢魔ヶ時の事だった。

目を覚ました少女（幼女？）は、上半身を起こし、無表情に俺の住処を寝起き特有のボーッとした様子で見渡していたが、寝そべっている俺と俺の上で未だに眠つているクルミを見て、コテンと首を傾げた。

「……誰？」

少女は起きた時と同じく無表情でそう尋ねてくるが……びついたものか。

少なくとも色合いとサイズ以外は比較的肉食獸おおかみな俺に普通に声を掛ける事とか、肌は白いし、髪は金髪だし、今初めて気づいたけど目も碧の見た目完全な外人さんが日本語を話した事は、まあ置いておいても良い。

こちらとしても五十年間まともな話し相手が存在せず、最近はクルミがいたとは言え、話に飢えていると言えば飢えている。飢えてはいるのだが、その、何と言つか……名前かあ……名前ねえ……。俺もほんの五十年前までは人間だったのだ。当然、名前ぐらいは持つていて。だが、何と言つか、その時の名前は余り使いたくないと言つか、字が女っぽい所為で嫌いと言つか……。

クルミの時はどうしたかって？あいつは最初から俺の事は大将つて呼んでたから名乗つてないんだよ。つまり、狼モドキになつてから初めての名乗りである。……本当にどうも。

「いや、なんだ。俺は兎も角、そう言つ君は誰なんだ？人……じゃ  
ないけど、名前を尋ねる時は自分からだつて最近言われたんだぜ？」

結局、どうするか決まらずに苦し紛れにお茶を濁す俺。

まともに言葉が話せる奴が殆ど存在しない中で誰に言われたんだとか言つ突つ込みは無しだ。と言つた、五十年も前の事なのにどこぞの最強の悪魔憑きのパクリの様な言葉がすらすらと出てくる俺はどうなんだろう。ああ、アレって次で最終巻だったのに読み損ねたんだよなあ……いや、それよりもゲームの方が先だったか。どちらにしろ、もう今じゃ、どちらも手にする事が無い物だ。

だが、そつは分かつてはいるが、五十年経つた今でも諦めきれない訳で……って、今はそんな事はどうでも良い。

壮大に獣道にぶれまくった思考をブツ千切つて寝そべつたまま、少女に目を向ける。

「……ラファ」

「らふあ？」

「ラファ」

らふあ、ねえ。……ラファ、だよな？カタカナ、と言つ事は欧米系統のはず。ますます日本語を話す事に違和感を感じるな。いや、カタカナ？……おお、その手があつたか。

「じゃあ、取り敢えず俺の事はアヤシとでも呼んでくれ

「ん……」

俺がそう言つと僅かに顎を引き、頷くラファ。因みに、俺の人間の

時の名前は緋月絢詩<sup>ひづき あやし</sup>と云つ。字だけ見た奴らは揃つて女だと勘違いしゃがつたよ。

取り敢えず、読みは兎も角、漢字は絶対に変えん。意地でも。と、俺の決意表明は置いといて、それよりもまずはラファの事だ。

「幾つか聞かせてもらつが、お前、何でそこにいた

「あそこ……？」

「イツ、もしかして自分がいた場所が分かつてないのか？

「……がどこだか、分かつてるか？」

俺がそう云つと、ラファは目を覚ました時の様に住処の中をキョロキョロと見渡し始め、

「……どーへ、

相も変わらずの無表情で、首を傾げる。

「……まずはそこから説明が必要か

そう云つて、俺は溜め息を吐いた。

一先ず、俺がラファを見付けた時の事をザックリと説明し、俺の疑問に答えさせていたのだが

Q・竹林にいたのは何故？

「家出した」

Q・どうして？

「喧嘩した」

Q・氣絶したのは？

「滑った」

Q・何処から？

「ん（指で空を指す）」

この通り話になりません。

何この子、電波さん？空でも飛んでたのか？いや、それでも滑つたつて言う表現はおかしくないか？

その他にも幾つか質問したのだが、無表情がデフォだから何考えているのかが全く分からぬ上に、例に漏れず全て回答は一言。せめてもの救いは質問に素直に答えてくれる事ぐらいだ。それでも、結局殆ど分からなかつたと言うのは、変わらないんだけどな。そして、現在。

「スー……スー……」

「どうしてこうなつた……」

日もどつぱりと沈み、完全に夜になり、ラファアが俺に寄り掛かつて

寝てしまった。しかも、掛け布団代わりにか俺の尻尾を離さない。何故だ、何故ここまで懐かれた。アレか？取り敢えず食える物つて事で木の実とかを探して来たからか？それとも沈黙を嫌がつて、色々と人間の頃の　宗一の修羅場とかその他の話をしたからか？

『両方だと思うッス』

……全く否定できない。いや、する必要もないんだけど。別に懐かれて困る事も無いんだし。だが、このままと言う訳にも行かないだろう。狼おれが子供を育てるとか、それ何て狼少年つて言う話である。今の段階でも十分に可愛い（俺は口リコンじやないぞ）将来有望な子を、栄養失調で死なせる訳にもいかんし、それに、その内家族が恋しくなつて自分から帰るだらうしな……。それで、だ。

「おい、チートリス。ラファの事だが、どう思つ」

俺の首の上に乗つかつているクルリに声を掛ける。

『チートリスつて……』

うるせえ。お前なら俺が気付かなかつた事でも気付くかと思つて期待してゐるんだ。さつやと答える。

『そうツスねえ……。大将の質問への答え、アレは嘘を吐いてないと思つツス』

「ふむ」

クルミがそう言つのならば、まず間違いなく嘘は吐いてないだろう。

こいつの勘や洞察力って言うのは全く持つてバカにならない。何度も言うが、こいつはこいつでおかしい。

だが、だとすれば、少なくともラファは本気で空から落ちて来たと言つ事になる。それも足を滑らせて。……クルミの事は信頼しているが、だからと言つてそんな荒唐無稽な話をポンポン信じられる程、思考が柔軟な訳でもない。まあ、俺の存在の方がよっぽど荒唐無稽と言えない事も無いが、少なくとも、俺は実際に目で見たもの以外は信じる事は出来ない性質だ。

『それと……』

考えを纏めていると、クルミが何か言い掛けるが、すぐに口を噤む。その後の言葉が続かないのは、言つべきか迷つてゐる、と言うよりも、言葉を選んでいる、と言う感じだろう。実際に、クルミが再び口を開くまで、そう時間は掛からなかつた。

『何となく、俺や大将に近い様な……正反対な気が……』

「…………」

狼にも表情と言つ物があるならば、今の俺は酷く難しい顔をしているだろう。

俺と似てゐる、と言つのは分からなくも無い。五十年で獣の生き方が染み付いてはいるが俺だって元は人間だ。だが、クルミとも似ていて、更には正反対？正直訳が分からぬ。と言つて矛盾してるだろうが。

『でも、俺達と同じで普通の生き物っぽくないのは確かツス』

「普通の生き物っぽくない、か……」

ラファは俺の体を枕代わりにしてスヤスヤと穏やかな寝息を立てている。

やつぱり、色々と事情があつたりするんだろうか。まあ、その事情に俺自身から進んで関わる事はないし、嫌がる事をするつもりは尚の事ない。ただ、こんな小さな子でも、それなりの事情があつたりするんだと思うと、何とも言い難い気分になるだけでつて、一寸待て。

「おー。今のおい方だと俺とお前もまともじゃない事になるやー

『気付いてなかつたんスか?』

「えつ

『えつ』

「何それ怖い

どうやら、俺は狼ですらないらしい。俺の正体はいづこへ……。

詳しく述べば、俺自身は、クルミと初めて会つた時から動物とも違う何かであり、クルミもここ数ヶ月共に行動した結果、質の違いはあるが俺と同種に為つたらしい。で、そんな俺らとラファは似ているが、正反対の存在の様な気がする、となるほどなるほど。

『何か分かつたんスか?』

「分からん

『……』

おいら、まず自分の正体も分かつてないのにラファの事が分かる訳ないだろ。だからそのジトッとした視線を引っ込めろ。

まあ、実際の所、別に自分の正体が何かなんて言うのは、どうでもよかつたりする。別に正体が分かつたからと言つて、今までと生活が変わる訳じゃないし。変化があるとすれば、ラファの存在だらうけど、まあ、それも一、二日で元に戻るだろう。そうなればほら、今までの五十年と何う変わりなく天寿を全うできるだろうさ。

取り敢えずではあるが、今回の事を結論付けて、俺は目を閉じた。

「そう思つていた時期が俺にもありました……」

「……どうかした？」

今日も今日とて山の中を飛び回つている途中で漏らした咳きが聞こえてしまつたのか、首にしがみ付いているラファが首を傾げているのを、適当に何でもないと誤魔化しておく。実際に大した事じゃないし、人に話す様な事でもないし。ラファも、そんな俺の雰囲気を感じたのか、それ以上は何も言つてこなかつた。

さて、ラファを拾つたあの日から太陽が昇つて沈んでを繰り返す事三十二回、未だにラファは俺達と共にいた。……と言つよりも、むしろ前よりも懐かれた？

『ラファア、何度も言つッスけどね、大将の上は俺の特等席なんス！  
！そこを退くッス！』

「いや

『大体、何でラファアが狩りに付いて来るんスか！！役に立たないの  
につ！』

「役に立つてないのはクルマモ一緒」

『ラファア、お前は今言つてはならない事を言つたッス……！』

直接見えないが、取り敢えず一人が険悪な雰囲気真っ只中なのは分  
かる。と言つた、俺の上で喧嘩するな。首にしがみ付いてる所為で  
声が五月蠅いんだよ。クルマ、おまえじやラファアには絶対に勝てな  
いから止めとけ。燃やされるぞ。

『それでも引けない戦いが、ここにはあるッス……！』

格好良く言つてもただの背中のポジション取りじゃねーか。そして、  
ラファア。頼むから戦闘態勢に入らないでくれ。力を集中させるなそ  
こでやられると俺にまで被害がくるんだよおい！！

ドオン  
ッ！！

汚い花火が、山に咲いた。

「テメヒら、いい加減にしろよ……？」

所変わつていつもの住処。だが、そこにいつもの平穏はない。濃厚にして純正の怒氣殺氣狂氣畏れ。それら全てが、たつた一人と一匹に向けられていた。直接向けられていらないにも関わらず、山の動物どころかそれら周囲の竹林や森に住むものすら逃げ出している。そんなモノを直接向けられている彼等の心中は推して知るべし。クルミはカタカタと震え、ラファもいつもの無表情ながら、顔にはダラダラと冷や汗を搔いている。

「なあ……」

『「（ビクウツ……）」』

いつもより低い、明らかに怒氣をはらんだ声に過剰に反応する。

「今まで散々言つてきたよなあ？ 仲良くしろつて。なのに何で喧嘩すんのお前ら！」

言葉を吐き出す度に場の空気が更に重くなつていぐ。嫌な緊張感が  
ブレッシャー

巣穴に満ちていく。

「特にラファ。お前のアレは使う場所を考えろつて言つたよなあ。今回は怪我ですんだから良いものの、死んじまつたら俺でもどうもねえんだぞ。猛省しろ！」

「……『めんなさい』

『すいませんっス……』

そう言つて頭を下げる一人を見て、感情の放出を解いた。まあ、二人ともしつかり反省しているみたいだし、もついいだろ。

「ん……」

するとすぐにはラファアが首にしがみ付いて顔を埋めて来る。怒られたすぐ後に、相手の感情を読み取つてそれが出来るなら、お前は大物になるだろうよ。

『て言つが、大将、『畏れ』まで使つてたツスよね……』

そう呟くクルミの方は未だに少し顔色が悪い様に見える。いや、リスクだから顔色なんて分からんだけども。

「当たり前だ。それぐらいしなきや分からんだろうが

『やり過ぎッスよ！』

「もう一遍いってみるか？」

『すんませんしたつ！』

分かればいい。クルミがボソッと、鬼畜だ、とか呟いてたが、知つたこっちゃない。

それよりも、ラファアの事や、何故一人（？）があれ程の爆発に巻き込まれて、傷一つ無いか、について説明しよう。

まず、どうしてラファ<sup>あんなこと</sup>に爆発<sup>あんなこと</sup>が出来たか、たが、俺達は勿論、ラファ本人にも具体的な原理は何一つ分かつてない。ただ、感覚的に使つてゐるが、ずっと昔から当然の様に使えたそうだ。

俺とクルミがその事実を知つたのは出会つた次の日の事。ラファの食事に、と魚を取つて来たはいい物の、幾らなんでも生のまま食わせる訳にもいかん、と悩んでいた時、もうやけくそでラファに「火、持つてないか?」と聞いたのだが、ラファはただ「ん」と頷き、集めておいた小枝の中に手を突つ込んで、それを燃やしたのだ。もう呆然としたね。クルミの奴は初めて見る火にはしゃいでいたが（本当に獸か?）・・・・・。

この時、クルミが言つた様にラファが人外であると判明したのだ。因みに、火だけでなく、それこそ死者甦生以外の殆どが出来るらしい。

で、もう一つ。ならば、どこまで出来るか試してみよう、と思い付き、やらせてみたのだが……見事にぶち壊してくれたよ、巣穴を。あれにはさすがのクルミもポカンとしてた。たが、こつちの話はこれからだ。その時、俺はあまりの状況に現実から目を背けようと、一言呟いた。

『ねーよ』

その瞬間、崩れた巣穴が崩れな筈の巣穴が、元の姿で、そこにあつた。

出来る可能性があるとすればラファだが、そのラファがいつもの無表情を崩し驚愕していたから違つ。クルミは初めから論外。ならば俺か?と考えた所で、ある単語が頭に思い浮ぶ。

『肯定と否定を操る程度の能力』

この時、俺は初めてこの能力を使った。

その後の実験によつて明らかになつた能力の本質は『世界の書き換え』。『肯定』により創り、『否定』により抹消する。有無を問わず、俺の是非一つで世界を変える事が出来る能力。『魂へ不干渉』と言つ制限もあるが、十分だろつ。

つまり、爆発したのに誰にも傷がないのは、俺がその事実を『否定』したから。

まあ、死んだら魂が無くなる所為で能力が発動しないから、今回はきつちり説教させてもらつたがな。

「で、そろそろ出でこないか？」

巣穴の入り口の方ににらみ付ける様な視線を送る。

クルミやラファは気付いてない様だが、舐めてもらつちゃ困る。この山は俺の庭だ。異物のにおいが混じつてりや、気付くに決まつてるだろ。

「へえ、いつから気付いとつた？」

そう言いながら、一人の男が巣穴に入つてきた。

その男は、身長は百八十多ばで体の線は細く、ラファと同様に古代西洋から来たかの様な服装に革のサンダル、瞳は混じりつ氣のない青、髪は鮮やかな短めの金髪をオールバック風に軽く上げている。そして何より、一番目を引くのは、絶えず今でも軽い笑みを浮かべているその顔である。

イケメン。そう、イケメンである。モテない男の敵、人生勝ち組、差別の象徴

イケメンである。

「ラファが爆発起こした辺りだよ」

吐き捨てる様に答える俺は相手がイケメンと言つ時点で敵意丸出し

だ。イケメンなんぞ滅んでしまえばいいのだ。

「何や、初めから気付いとつたんかいな。随分鋭いんやねえ」

「隠れるつもりなんか無かつた癖によく言ひつ」

確かに、隠れてはいたが、それはあくまで姿だけだ。視線も気配も隠す気なぞ微塵も感じなかつた。ただ単に舐められていたのか、それとも何か理由があつたのか……服装や髪からして、十中八九ラファの関係者だろうが、それはイケメンである事を別にしても警戒を解く理由にはならない。今問題なのはラファとどう言う関係か、だ。と言つか、ラファと言い、この腐れイケメンと言い、何で外人の癖に日本語ペラペラなんだよ。しかもコイツに至つては似非関西弁だぞ？畜生、どうせその胡散臭い上に似合つてない喋り方もイケメンだからつて理由で許されるんだろう？死ねよ、ホントに。

「で、何の用だ」

「いやな、その子を連れ戻しに来たんやけど……」

その子 確実にラファの事だらう。コイツとどういふ関係かは知らないし、知らなくていいならそれでいい。それこそ、ラファに一言聞けば済む話だ。

だが、たつたそれだけの事が出来なかつた。

アイツがそこで言葉を切つた瞬間、全神経全感覚を目の前の存在に集中させる。いや、否応なしにさせられる。脳が、俺の五十年で培つてきた洞察力が、野生の勘が、その全てが警報を鳴らす。全身の毛が逆立つのを感じる。注意信号通り越して危険信号だ。

「キリ、随分面白そうやねえ」

俺を指さしてそう言つた否かと言つた時、俺の意志に關係なく既に体は動き出していた。全身の筋肉を使つた停止から最高速への瞬間的な加速。普通なら反応すら出来ない筈の、必殺の一撃で無防備に晒された首に喰らい付く。

グシャリ ッ！！

肉を碎く音が響いた。

## 狼と人外達（後書き）

えー、急展開過ぎてワロタ、とかは言われるかもしさないとビクビクの目だまです。と言つか、書き直してるけど、前より少しは向上してるのか？もういつその事、一度削除した方が良かったのかな？と、思わぬもないですが、まあ、それはそう言つ意見があつた時に、と言つ事で。

誤字脱字報告や感想があれば、下さい。特に感想は作者が狂喜乱舞します。批判は心が折れない程度にお願いします。

ではまた次話で。

## 狼と『神』と新天地（前書き）

この物語はフィクションであり、作者の妄想から滲み出た物です。ある事柄へ明らかにイメージを壊す物が描かれていますが、事実無根の妄想ですので、笑って済ませてください。お願いします。

## 狼と『神』と新天地

ただし、噛み碎いたのは、相手の左腕だ。

「 ッ！？」

あり得ない。今、俺に出せる最高速だぞ？それに反応する所が、きつちり防御しやがった。どんな化け物だコイツは。実の所、この巣穴の入り口はそこまで広くない。俺が入れる程度だ。つまり、最初から回避は不可能。少しでも避け様とすれば間違い無く殺せていた。さつき、俺を指さしたのが右腕だったのを考えると、コイツの利き腕は右。と言う事は、とっさに左腕を出したんじやなくて、きつちり見てから反応したと言つ事になる。奇襲を受けたにも関わらず、この状況でコイツはほぼ満点の対応をしやがった。

「 ハア ッ！！」

そこまで思考を巡らせ、左腕に喰らい付いたまま、さらに地を蹴る。攻撃自体は防げても、そもそもの大きさが違うのだ。勢いまでは殺せない。

「 うおっ！？」

結果、俺に押される様な形で山を強制的に下ろされる。途中にある木々をへし折りながら麓まで一直線。止めにその勢いのまま相手を投げ飛ばす様に体ごと振るい、左腕を千切る。投げ出された相手は、麓の森の木を数本折った所で止まつたらしく、砂埃が立ち込めている。

「……クツ」

砂埃が晴れていく。そこに、ソイツは立っていた。一の腕から先が無くなり、血をダラダラと流してはいるが、最初と同じ様に平然と、笑みを浮かべて立っていた。いや、その顔に浮かんでいるのはむしろ最初よりもずっと愉しそうな笑みだ。

「クツクツクツ……アーハツハツハツハ……ええで……最高や……」

「…………」

片腕を失くしたにも拘らず突如笑い出したソイツを見て、俺は何も言えなかつた。と言うか、ぶっちゃけ引いていた。ドン引きである。だつてアイツの左腕、見事に失くなっているんだぞ？傷口の周りの服は真っ赤に染まり、傷口からは白い骨が見えてるんだぞ？そんな状況であんな風に笑つている奴がいた普通に引くだろ。

一頻り笑つて落ち着いたのか、フウ、と静かに息を吐き、そして、急に空気が重くなつた。

「ツー？」

何だよ、これ。俺がさつきまで放つていたアレとは比べ物にならない。まるで深海の中にいるみたいだ。重圧に潰されそうになる。周りの木々までが悲鳴を上げるかの様に軋む。だが、瞬時に自らに掛かる重圧を否定し、いつもの状態まで戻す。筋肉も縮まつてない。視界も良好。思考も平常。大丈夫だ。まだいける。

「その姿になつてたつた五十年程度でよくもまあ、ここまで容赦無く殺そつと出来るもんやねえ。ほんま感心するわ」

「テメエ相手に余裕が持てるなんぞ思つてねーよ。俺は分を分ける性質なんだ」

「ええねえ、その態度。ますます気に入った……わッ！」

そう言い切ると同時に一気に距離を詰めてくる。少なくとも五十メートルは離れていた筈なのに、その距離を一瞬で潰された。おまけに相手からはラファアが使うのと同じ様な力を感じる。だが、密度も量もラファアとは桁違い。この山一帯消し飛ぶんじゃないか？

「チイツー！」

真正面から右拳が振り抜かれる。フェイントも何も無い真っ正直で力任せの一撃。

思考は刹那。俺はその一撃を横に跳んで回避する。再び距離を取つた時に、その判断が正解だった事を理解した。

「げえ……

抉れてやがる。何が？地面がだよ。拳の軌道に合わせて振り抜かれた位置から見事に一直線に深い溝が出来、その延長線上にあつた木など言うに及ばず見事に粉碎されてやがる。……これ、掠るだけでもアウトじゃないか？

拳を振り抜いた状態で止まつていたイケメンがゆっくりとこちらに体を向ける。

その顔は相変わらず笑つたままだが、何と言つか、笑顔の質が変わつた気がする。今までのが大人が浮かべる微笑の様な感じだとすると、今は新しい玩具を見つけた子供の様な無邪気な、だが、愉悦に染まつた様な笑みだ。それを踏まえた上の結論。

(「こいつ、戦闘狂かよ……！……）  
バトルシャンキー

「今のをかわすか……なら、次は

」

「そこまでです」

イケメンが喋つてゐる最中に凜とした、芯の強そうな声が割り込む。それと同時にどう言う理屈か、俺にすら見えない速さ、と言うよりも瞬間移動でもしたかの様に、数十にも及ぼうかと言う外人が手に剣や槍を持ってイケメンと俺を取り囲む。

えつと、これ、今どういう状況？

「主、それ以上はここいら一帯が消し飛びます。やめて下さ」

俺が今日は千客万来だなあ、と状況に付いて行けず現実逃避していると、二人の女性と一人の男が人垣の中から一步前に出てくる。

一人は銀髪をポニーtailにした、吊り目で気の強そうな美人。背は女性ではそれなりに高く、どこが、とは言わないがある一部の所為でスラリとしている様に見える。さつき、あのイケメンを止めてくれたのは彼女の様だ。

「いや、せやかでこんな面ひそつた相手やつたら全力でやうな……」

止めてくれ。一撃で死なない限りは『否定』で治せるが、お前の場合は一撃で消滅させられそんなんだよ。と言つた、本当に面白そつてだけで俺と戦つたのか。真正の戦闘狂じゃねーか。

「ダメですよ～。あるじの後片付けは私達の仕事なんですからね～？」

さっき前に出て来た内のもう一人の女性の方が口を挟む。

赤味が掛かつた髪を肩に掛かる程度で切り揃えており、一目見ただけでどこかのんびりとした雰囲気が感じ取れる。さっきの女性とは色んな意味で正反対だ。どこが、とは言わないが。と言つた、俺つて結構余裕があるんだな。こんなしょうもない事考えられるつて。それにして、この人の言葉に俺らを囲んでいる奴らが全員頷いているんだが…… アイツどれだけ暴れたんだよ。

「と言つて、あるじには私とガブちゃんからのお説教ですよ？」

そう言つ横でガブちゃんと呼ばれた女性が頷いている。それを見て見る間に顔が青褪めていくイケメン。

どんな説教かは知らないが、出来るだけきつちりやつておいて欲しい。もう一度と俺に近付かない程度に。

「フツ、ボクが大人しく拷問くわいもんを受けると思うたら大間違い

」

「『我、汝の動きを禁ずる事を告げる』」

イケメンが逃げようと身を翻すが、その動きはガブちゃんさんの一言によつて止められた。と言うか、今拷問つて書いて説教つて読まなかつたか？……まあ、いいか。既に経験ありそuddish、大丈夫だろう。ほら、左腕もいつの間にか治つて 何で治つてる んだよ、おい。

「さあ、行きますよ。あ、皆さんもお疲れ様でした～

「ウリ、事情の説明はよろしくね

そう言つて、動けなくなつたイケメンにどこからか取り出した鎖で縛り上げ、余つた鎖の端を掴み、颯爽とにこやかに飛び去つて行つた。……マジかよ。人が飛んだぞ？ どう言つ理屈で飛んでるんだよ。重力仕事しろよ。しかも、いつの間にか周りの奴らも消えている。本当にどうなつてるんだ……。

そして、状況にも場所的にも取り残されている俺と、俺に説明してくれるらしさいウリと呼ばれた茶髪の青年。身長は百七十後半つて所、田付きが若干悪いが、顔の作り 자체は良いからワイルドで済む程度だろう。

「おい。説明は後でさせるから、取り敢えずラファの奴連れて帰つて良いか？」

若干、口調は荒いが、話が分かる常識人と言つた所であろうか。少なくとも、アイツみたいに問答無用で喧嘩売つてくると言つてはないらしい。と言つたか、ウリくんの顔にも疲労の色が浮かんでいる。

「まあ、俺は説明してくれるなら文句は無いけど……」

そこまで言つと、前足に何か引っ張られる様な感覚を覚えた。

「ん」

そちらを見れば、いつの間に來ていたのか、肩にクルミを乗せたラファが俺のすぐ横にいた。しかも、俺の前足の毛を握り締めている。その様子を見て、ウリくんは嘆息し。

「あんたらも一緒でいいから

と、そう付け足した。

「さて、ようじや。ボクの城に」

イケメンの突然の襲撃から十数分後。例のイケメンがそう言った。その姿がさつきよりもボロボロになっているのは氣のせいではないだろう。

それにも、城、ねえ。周りを見渡せば、俺とクルミの正面には豪華な机と椅子、そしてそれに座るイケメン。そして、ここから少し離れた位置には規則正しく並んだビジネスデスクと、そこを慌しく動き回る外人っぽい人々。……どう見てもただのオフィスです本当にありがとうございました。とは言つても、それは地上にある場合であつて、雲の上にある場合はただの、と言つ表現は正しくないが……少なくとも城ではないと思つ。

「さて、ようやねえ。まずははつせつとボクの正体からこか」

もう何でも良いから早くしてくれ。俺はもう疲れたんだ。今日一日でどれだけ精神すり減らしたと思つてんだ。早く巣穴に帰つて眠りたいんだよ」つづけは。

「狼君に分かる様に言えば『神』、『この星の意思』、『歴史の修正力』ってどこかこな」

「……は？」

おい、今こいつは何と言った？『神』？まだいいだろう。まだ確認は出来ていなが、この世界が能力名通りに東方の世界だとすれば、妖怪や魔法使いまでいるんだ。神様ぐらいてもいいだろう。だが、他の二つは違う。明らかに柄がおかしい。それはこの星その物と言う事じゃないか。

「ああ、今君が思つたる通りで間違いないで？ボクはそう言つ存在や」

何でこいつた。俺はそんなもんとやりあつたのか……。いや、それなら尚の事、星の意思が似非関西弁つて言つのはどうなんだよ。……うん？待てよ、だとするとララフア達は

「おっ、気付いた？まあ、さすがに『神』『ララフア』『ウリ』『ガブ』と並べられて分からん程君は鈍くあらへんもんなあ。ついでに、もつ一人の愛称は『ミカ』やで？」

「マジかよ……」

今度こそ頭を抱えた。いや、あくまで狼だから出来ないけども、出来る事ならそうしたい気分だ。

これだけ名前並べられて気付かない奴はいないだろう。さつきから驚いてばかりの様な気もするが、それも仕方が無いだろう。だって、あのどう見ても見た目子供以外の何者でもないララフアが『大天使』だって言われたんだぞ？と言つたか、俄か知識しかなかつたけど、色々と宗教観が崩れた。

「まあ、色々とショック受け取る所悪いけど、もう一つお知らせが

あるで？」

「……何だよ」

「わざわざひとでもなつてしまえ。今更何言われたつて驚くものか。人間（？）、驚きすぎると平常心に戻る物だ。

「狼君とリス君の事やけどね、君達の正体は『妖怪』。『妖獸』『魑魅魍魎』なんて言い方もありやね」

「一寸待て」

確かに自分が妖怪だつて言つのには驚いたが、それは今更だし、思い当たる節もいくつがある。それに、俺自身が変わらなければ俺の正体を知る事に意味は無いと思う。だが、それ以上に気になる事がある。

「何故、お前がそんな事まで知つている」

俺の当然の疑問を、ソイツはニヤリと笑つて答えた。

「言つたやろ？歴史の修正力や、と。アカシックコードぐらいには繋がつとるんやで？」

「……もう嫌だコイツ。色々と規格外すぎるだろ、本當！」

「で、や。実の所、君達をこのまま帰すわけにはいかんのや」

神 何かイラつくて暫くはイケメンでいいだろう

がいきなりそんな事を言い出した。

「『はづ.』」

その言葉に、俺と今まで空氣もいゝ所だつたクルミの疑問の声が重なる。込められた思いはただ一つ。

何言つてんだ、コイツ……？

「ああ、別に殺すとかやないから安心してええで？君達にはここで強くなつてもうつで。歴史がそう言つ風になつとる」

つまり、これから先、俺達が強くなつていないと歴史的に不都合になる、と言つ事だらう。そのために、俺達をここに残す、と。

「それに、ラファも懐いとるし、ボクは遊び相手が出来る。君達は強くなれる、と。ほら、一石三鳥や。それに、正直皆ボクが出た時点で強化フラグやて分かつとつたやううし」

「一体何の話だ。が、確かに俺たちに不利益は無い。と言つか、選択肢が無い。拒否権とかないだらうし。つまり、俺達には頷くしかないのだ。これ、絶対脅しだよ。だつてアイツ、しつかり拳握ってるんだもの。

そして、俺達の天国の生活が始まる事になつた。

「で、何でお前喋らなかつたの？」

『『神』とか『妖怪』とか、正直何言つてるか分からなかつたツス  
……』

「あー……」

さすがのチートリスも知らない言葉はどうしようもないらしい。この後きつちりと説明しておいた。

## 狼と『神』と新天地（後書き）

主人公のキャラが大分変わった様に思う目だまです。でも殺伐とした世界を殆ど一人で五十年生きていけばこんな感じになると思うんだ。時代とシナリオが一寸変わる程度でここまで変わるんだねwww

誤字脱字や感想があればよろしくお願いします。例によつて批判はお手柔らかに・・・・・。

狼と千年（前書き）

取り敢えず、連投はこれで最後です。

「『第一回 ドキドキ 神様と学ぼう 狼君の存在の非常識を編』  
～！イエ～イ～～ドンドンパフパフウ～！」

「『…………』」

さて、神様（失笑）の襲撃プラス衝撃の事実の大暴露大会から一夜明けた今日。

どう言う訳か、昨晩こいつらの家と言つ名を借りた宮殿モドキの豪華な部屋の一室を宛がわれ、朝起きたらいつの間にかラファ、が俺を枕にして寝ていた、というハプニングはあつた物の、それ以外に特に問題も無く快適に過したのだが、部屋を出た途端、神様（爆笑）に拉致され、気が付けば昨日と同じ場所に座らされており、昨日、豪華な椅子や机があつた場所には、何故かマジックボードと水性のマジックペン（黒と青の一色）を持つた神様（苦笑）がいた、とうん、取り敢えず目の前の存在が諸悪の根源の様だ。噛み付けばいいのだろうか？と言つた、さすがに星その物な奴に非常識とか言われたくない。

「何や、テンション低いでえ二人とも」

「朝っぱらから拉致られてテンション上がる奴が居たらそいつはおかしい」

『まだ眠いッス……』

「さて、取り敢えず狼君には自分の事をしっかりと理解してもらわなあかん」

ばつさり無視しやがつた。

そしてラファを含む大天使の四人が後ろの方に控えてるんだが、大天使って暇なのか？しかもその内ラファとミカさんは舟漕いでるぞ、おい。

「まず、力の説明からいこか。能力とはまた別の、種族によつて変わる潜在的な力やね。種類としては四つ。まあ、今は月にある連中合わせて三つしかあらへんけど」

そう言つてホワイトボードにペンを走らせ、『靈力』『妖力』『神力』『魔力』の四つの単語を書き込んでいく。何故漢字なのか、とかは今更特に突つ込む様な事でもないんだろう。だつてこいつだし。

「字面で大体分かるやろうけど、それぞれ『人間』、『妖怪』、『神』、『魔法使い』が持つ力やね。尤も、『魔法使い』はまだおらへんから除外、つと」

更に四つの力の下に矢印を書き、対応する種族をホワイトボードに付け足すと、最後に『魔力』と『魔法使い』の上から纏めて×を記した。

そう言えど、『魔法使い』がまだいない、と言う事はここは俺からすると過去と言う事なんだろうか。可能性としては、人類が滅んだ後の世界も考えていたんだが……後で確認しておかないとな。

「普通、これらの力を複数持つのはありえへん。ありえへんのやけど、狼君はちやう。妖怪として生まれた事で『妖力』、更に人としての魂を持つとる所為で微かにやけど『靈力』まで持つとる」

微かについて……役に立つのか、それ。

「今ままじや役に立たへんよ?でも『靈力』は修行で、『妖力』は生きればそれだけで向上していく様になつとる。どうせ、ここにあつたらいつかは神格化するやううつし教えとくけど、『神力』は信仰を受ければ上がるで」

おい、どうせつて何だ、どうせつて。

「使い方の違いとかもっと細かいとこもあるけど、まあそれは実際にやる時でええやろ。さて、力についてある程度理解してもらえたとこで、次は能力についてやね」

そこで一度、ホワイトボードに書かれている言葉をどこからか取り出したクリーナーで消すと、デフォルメした自分と吹き出しを書き、その中に能力と書き込んだかと思うと、デフォルメした絵が思いの外上手くいったのか、それを少しの間一いや二やしながら眺め、それからようやくこちらを向いた。……何やつてんだよ。

「さて、リス君の能力も後で解説せなあかんけど、まずはこいつやね。『畏れを抱かせる程度の能力』」

「『肯定と否定を操る程度の能力』はいいのか?」

「うん?ああ、そつちは後でひたすら練習するだけでええんよ。まだ甘いけど、使い方自体は間違つてへんから」

……つまり『畏れを抱かせる程度の能力』は使い方が間違つていて、と?……あれ以上どう使えばいいんだよ。

』と言つた、俺が能力持ちつて言つたのはスルーッスか、大将……』

まあ、むしろ納得したな。お前は能力持ちじゃないとありえないだろ、逆に。じやないとお前のハイスペックぶりは理解できない。

「さて、『罪れを抱かせる程度の能力』やけど、別に使い方が間違つたる訳やない。ただ、能力の意味合いがちゃうんや。さて、ここで問題や……」

ビシッと音がするぐらいの勢いで俺達にペンを向け、相変わらずのイケメンスマイルで、その問題とやらを口にした。

「『妖怪』や『神』はどうやって生まれるでしょーかつ？」

えつと、普通に生まれるんじゃなくて？と言つた、その一つは同系列なのか。むしろ正反対の様な気がするが……。と、頭を働かせていたのだが、少しすると神様（馬）がブツブツ、とか言い出した。

「ハア～イ、時間切れえ！！正解は、『人の想像』からや……」

「『人の想像』？」

ちょっと予想外の答えに俺とクルミがそろつて疑問の声を上げると、ホワイトボードに新たな書き込みをしていく。

「せや。『幽靈の正体見たり枯れ尾花』『鰯の頭も信者から』。『妖怪』は人の恐怖から、『神』は人の信仰から、それぞれ生み出される」

そう言つて、まあ、ボクや狼君みたいな例外もあるんやけど、と付

け足し、更に解説を続ける。

「そして、ここからが重要ななんやけど、『妖怪』や『神』が死ぬ事は殆どあらへん。でも、消えることはある」

「…………」

それは、まあ分からぬ話でもない。

そもそも、東方はそうやって消え掛かった者達が集まつた幻想卿が舞台だつたはずだ。まあ、明言されてないし証拠もないが、この期に及んで、東方の世界じゃありませんでした、なんて展開はないだろ。そんな展開は誰も望んでないだろ。

「『妖怪』や『神』言つんは、結局はよう分からんもんの総称や。それが人の想像で脚色され肉付けされていき、形を得る。せやけど、科学が発達してまうと怪異は現象に成り下がる。そして、忘れ去られ、幻想になる。そなへんために、『妖怪』は人を恐怖させ、『神』は信仰を集めようとする。でも、キミの能力はそう言つた連中に真っ向から喧嘩売つとる」

スッと目を細め、今までのどこかお茶らけた雰囲気を消し真面目な表情で俺を見据える神。絶対的強者としての風格を身に纏うソイツは、確かに神と言つに相応しいだろ。

「キミはその能力を持つ限り、何もせずともどれだけ時代が進もうとも、決して幻想になる事はない。その時、『妖怪』であろうと『神』であろうと関係なく、そう言つた存在としてあり続ける」

確かに、それが本当ならば、いや、アカシックレコードとすら繋がつてゐるコイツが嘘を吐く事はあっても間違える事はないだろ

う。

だとすると、『畏れを抱かせる程度の能力』は間違い無くとんでもない能力だ。たったワンアクション起こすだけで、『畏れ』を集め続ける。人外に限った話ではあるが、それはある意味、どんな能力よりも便利な能力じやないか……？

「まつ、そーゆー事や。理解してのとしてへんのじや、大分違うからね。しつかり覚えとき」

そう言う神の雰囲気は、いつの間にかいつもの胡散臭い物に戻つていた。普段からあの状態でいたらしいのに。

「疲れるからイヤや」

そつかよ。後ろでガブちゃんさん残念そうに溜め息吐いてんぞ？

「じゃ、次はリスト君の能力を発表しよか」

流してやるなよ。部下だろ？後もうホワイトボードある意味ないよな？使つてないし。

「だつてイラスト消したくないんやもん……！」

「ダメだこいつ早く何とかしないと……」

もん、とか言つてんじやねえよ。気持ち悪い。イケメンだからって何でも許されると思つてんじやねえぞ『アリアーー！

「まあ、それは置いといで、リスト君の能力名は『あらゆるもの本質を理解する程度の能力』や。ぶっちゃけ特に説明いらへんやろ、

「これ

そこでぶつちやけてやるなよ。見り、クルリの奴自分の扱いの悪さに涙目になつてんぞ？

「ん~、やう言つてもなあ……あ、そや」

神が顎に手を当て考へていると、何か思い出したのか、指をパチンとならした。畜生、サマになつてやがるな、これだからイケメンは……。まあ、人間だつた頃はジミメンの代表だつた俺が言つても、ただの僻みにしか聞こえない、と言つた純百パーセントの僻みだ。

『何かあるんスか！？』

急な叫ぶなよ。驚いたじやねえか。と言つた、久々にしゃべつたなお前。

『正直未だに大将達の会話には付いて行けないツス

……「うん、悪かった。後でちゃんと解説してやるから、取り敢えずその泣きそうな顔を元に戻さにかしろ。

『……グスツ』

「うん、もうええかな？リス君の能力は今はまだ理解するだけやけど、妖力が使えるようになれば殆ど何でも出来るで？」

『え、そつなんスか？』

「細かい理屈もあるけど、取り敢えず本質が理解出来て、さらには活

用出来る力があるんやつたら出来ん訳がないやうひ?」

「なるほど。本質が分かれば応用も利く」と

そー言つ事やね、と神は俺の言葉に頷く。

クルミは自分の能力がそれなりに凄いと分かったのか、嬉しそうに俺の横ではしゃいでいる。はしゃいでいるんだが

「でも今は使い物にならないよな」

「そやね」

『分かつてゐツスよそれぐらいーー。』

俺の言葉に当社比三割り増しのぐらいの笑顔で頷く神。そして今度は普通に泣き始めるクルミ。……おおう、カオスだ。かく言う俺も、泣くクルミを見て若干顔がニヤけてる。どうも俺はいじめつ子体质の様だ。獣になつて気付くとは……。

「さて、じゃ、いつからは修行の時間やで?まずは妖力と能力の使い方覚えて、あつ、狼君は靈力もやな。そつからはひたすら実践や」

「『え?』」

「狼君はボクとラファ、リス君はウリとミカが面倒見るから。スバルタで行くでえ?取り敢えずの目標は妖術マスターして人型になる事やな」

「『え?え、どう言つ事?』」

神の奴は嬉々としてこれから予定を楽しそうに話しているが、俺とクルミは状況に付いて行けず完全に混乱している。と言つて、口イツに教わるとか完全に死亡フラグじゃねえか。

「じゃ、二人ともそつちは任せたで？逝こか、狼君」

「おい、止める引つ張るな！字が違うんだよ字が！完全に死ぬよなあ、俺！」

「大丈夫やで。致命傷でもラファアが治してくれるから。ラファア、『あらゆるものを癒す程度の能力』って言うの持つてんねん」

な、と呼び掛ける神にラファアが「ん」と頷く。  
なるほど、その能力はラファエルっぽい……じゃなくて、それは俺が死に掛けること前提だよな！？

「『死に掛ける事なくして成長はありえへん』バァイ『神』」

「違う、それは野菜人達だけで他の生き物は普通に死ぬから……」

普通はまずさつきみたいに座学から始めるもんだろー？何一つ分からないままやつても一緒だから……

「手取り足取り教えられた事は身に付かへん！実戦あるのみ！……」

「それは人斬り抜刀斎の流派だけだ！！」

そしてやつぱり字が違うんだよ……実戦じゃなくて実践だらうが……

「頑張つて」

「ラファ！？」

あれ？ ラファにまで見捨てられた？ いや、多分だけど本人は普通に応援しようとしてるんだろう。だが、今の俺には死刑宣告以外の何者でもないと言つ……。

「じゃ、まずはボクが攻撃するからそれを避ける修行からや。能力使おうが、ボクに攻撃しようが何でもありや」

そう言つて宙に浮かび、両手を広げる。……おい、掌辺りから漏れだしてバチバチ言つてるそれは電流じゃないよな？ 頼むから違うと言つてくれ――

「時間制限は今から昼間までにしよか。それじゃ、よおい

「

「／＼（^o^）＼＼

「スタートッ――」

「いや、ちよまつ……ギャアアアアアアアアツ――――――

現在の大凡の時刻、午前八時。昼までの時間、約四時間。

それから約四時間、辺り一帯に俺の断末魔の声が響き続けたとさ。

ここからはひたすらに修行の日々。正確に言えば、俺が生と死の境を行つたり来たりを繰り返す普通に考えれば天国にいるはずなのに地獄の日々。

神式ネタ修行によりボロボロにされ、瀕死になつたらラファが回復させると言う死にたくても死ねない無間地獄。何度アカシックレコードをネタ探しに使うんじやねえと声を大にしたことか。

『あらゆることを為す程度の能力』とか言う正しく全能の能力を持つてやがつた。欠点としては、自分にしか使えないとか、同時に複数の事は為せないとあるにはあるが、切り替えにタイムラグはないし、発動に予備動作がない為欠点が欠点になつていない。アカシックレコードも足して全知全能とか誰が上手い事言えど……。そんな神との修行風景の例を挙げると。

『ばあくれーつー！ゴオオツド、フィンガアーーーツー！』

またある時は

『キングクリムゾン!! 過程を吹き飛ばし結果のみが残る!!』

（返事が無い。ただの屁の様だ）』

そして時には

『天地乖離す

開闢の星ウウウウー！』

『どうから乖離剣出し そんなんもん（光に飲み込まれ叫びすら上げられない）』

……正直、今もまだ生きている事が不思議でならないんだが。

「ん～、今度の技は何がええかなあ……」

今までの修行風景を思い出して遠い目をしている俺の横で、鼻歌交じりにネタを考える神。……頼むから自重してくれ。

「大丈夫やで、今はもう死なへんのやから」

死ななければ何してもいいのかよ。死ななくても痛いんだぞ？と言ふか、最近ネタが酷くなり始めたのは俺が死ななくなつたからかよ。どうりで最近は過激なネタが多いと思った……。

はあ……と、溜め息を吐くと、

「どうしたの？」

胡坐を搔いている俺の足の間に座っているラフアが心配そうに俺を見上げた。

「いや、よく今まで生きてたなって思つてな……」

そつ答える俺の疲れきつた表情を見て納得したのか、黙つて頷きそのまま体重を俺に預けてきた。

まあ、もう分かっていると思うが、今の俺は人の形を取つている。

出来る様になつたのは、もう大分前の話だ。

普通、こつ言う転生物では、イケメンに生まれ変わるのがテンプレなんだろうが、残念ながら俺にそんな幸運が訪れる訳も無く、人間として生きていた頃と殆ど変わらず、特徴の無い地味な顔立ちと、身長は百七十行くか行かない程度で中背中肉の日本人として平均的な体格。昔と違うと言えば、髪が膝裏に届く、ぐらいに伸びた事と目付きが若干悪くなつた事ぐらいだ。

髪は後で一つに縛つているが、邪魔だ。正直、切りたいんだが、ラフアが切らせてくれない。何でも、綺麗だから勿体ないとか。男の髪が綺麗でもなあ……と、ここから出たら切ろうと隠れて決意していたりする。

まあ、目付きは地味な顔に特徴が出来た、とポジティブに考えているから気にしてはいない。と言つた、主に修行の所為で気にする暇が無かつた。

人の形を取れる様になつた事を筆頭に、幾つか修行の成果と呼べる物が出来たから、修行も無駄ではなかつたのかもしけないが、神のお蔭かと思うといまいち釈然としないものがある。

さつき言つていた「俺がもう死なない」と言つのも、修行によりある程度だが『肯定と否定を操る程度の能力』を使いこなせる様になり、俺の肉体から『死』と『老い』の概念を『否定』している。塵一つすら残さず消え去つたとしても、妖力さえあれば再生するのは、主に神との修行で経験積みだ。

なんか、思い出して鬱になつてきた……と、トラウマスイッチが入る直前に、神がこつちをニヤニヤしながら見ているのに気付いた。

「……何だよ」

「いやあ、ふと思つたけど、アヤシ君つて口リコンッ！」

「……」

ラファを足の上に乗せ、頭に手を置いている状況で言つても全く説得力は無いが、俺は断じて口リコンではない。そう、断じて違う！「これはあれば、年の離れた妹を可愛がるとかそんな感じだ。

「確かに全く説得力がないッスね」

と、後から聞きなれた声がする。

「……いつからそこにいた」

「さつきからッス」

そこにいたのは、人に化ける事によつて、今まで万人受けする見た目だったのが、ごく一部のお姉さまとかそこら辺の人達に大人気だらう見た目にクラスチェンジしたクルミだった。

癖つ毛混じりの栗色の髪、クリクリとした黒い瞳に童顔、小柄な、と言うか普通に小学生ぐらいに見える体格、と。まあ、簡単に言えばショタコンの人に狙われまくるであらう見た目になつていた。どうも、クルミの方は今日の修行は終わつたのでこちらに来たらしい。ミカさんことミカエルとウリくんことウリエルが修行を見つめてるので、無理なくこなせるメニューなんだと。まあ、ミカさんは天然でウリくんは口悪いけど、二人とも常識弁えてるからな。……羨ましい。

「じゃ、そろそろ修行再開しよか」

そう言つて、神が立ち上がるのを見て、俺はゲッソリした。

ああ、また地獄の扉が開くのか、と。あ、因みに地獄の主ことルシファーはシスコンだつたが、基本的にいい人だつた。神にはヤンデレだつたがな。是非ともN?ce Boatな展開になる様に頑張つ

て欲しい。

「スター ライト、ブレイカア————！」

ああ、今日はリリカルな魔法少女か、と既に回避を諦めた俺は、そんな事を考えながら原作の数十倍の太さはある光の奔流に飲まれていった。

と言うか、ネタ技に『否定』を無効化する様に細工をするのは卑怯だと思うんだ。

この時、俺達がここに来てから約千年。俺が元いた時代から六千万年前の話である。原作は、まだまだ先の様だ。

## 狼と千年（後書き）

今回は独自解釈満載の話でした。次からは一気に時間を跳ばすつもりです。紀元前数百年ぐらいまで。ついでに、ここでの生活は番外編かなんかで書きます、多分。神とその仲間達の出番はまだありますし。さて、次は何だろうな・・・。

ああ、ゴールデンウイークが終わる・・・。

感想や誤字脱字報告があればお気軽にどうぞ。それが作者の糧となります。

## 狼と死合と恋愛？（前書き）

さあ、毎度お馴染みの前言撤回だ！！！今回もオリキャラしか出でこないよ！！

# 狼と死合と恋愛？

「戦闘狂がつ！ いい加減当たれ！ ！」

叫ひを上げなかじ曲を舞ひ――の景

片方は徒手空拳、輝く様な金髪をオーリバッケにした背の高い男神。その顔には愉悦、どうしようもなく今の状況を楽しんでいる様な無邪気な、だがどこか狂気をはらんだ満面の笑みが浮かんでいる。

対するは右手は身の丈ほどの鎧の斧鎗を持った長い漆の様な黒髪を  
後で縛つた中背中肉の少年 最近になり名をアヤシから改め  
た否月妖始。男とは対照的に、その顔は苦渋の色が濃い。

対するは右手に身の丈ほどの鋼の斧剣を持つた長い漆の様な黒髪を  
後で縛つた中背中肉の少年 最近になり名をアヤシから改め  
た否月妖始。男とは対照的に、その顔は苦渋の色が濃い。  
妖始の手に握られた斧剣が神に向かつて振るわれる。その身の丈ほ  
どの鉄の塊を振るつているとは微塵も感じさせない動作は、常人ど  
ころか例え英雄と呼ばれる相手でも間違ひなく両断せしめるだろう  
が、彼の目の前にいる相手はこの世界における人外筆頭。常識？何  
それおいしいの？

「ハツハア！！」

ソニッケルーム  
衝撃波すら巻き起こし迫る斧剣を、神は笑い声を上げながら真っ向  
から拳で弾いた。

「ゲッ！？」

余りに常識外れな対応。

どう言う思考回路をしているのか、神は音速以上で振るわれる斧剣

に対し、回避ではなく相殺と言う選択肢を選び、あまつさえ打ち勝つてしまったのだ。それがどれだけ異常な行為かは想像に難くないだろう。そして武器を弾かれ完全に無防備になってしまっている妖始に、追い討ちの拳が放たれる。

「つおつとーー！」

だが、妖始もまともではなかつた。

武器を弾かれ、体が硬直している状態で放たれた避けられるはずのない一撃。それを、妖始はその場で搔き消える様に更に上へ跳ねた。この一人、何だかんだ言つて十分人外である。

「火闘降ほのすそりーー！」

神の宣言に従い、無数の火柱が発生する。触れるどころか、近付くだけでも焼け焦げてしまいそうな高熱が空間を支配する。

だが、そんな中でも妖始の動きが制限される事はない。『肯定と否定を操る程度の能力』により火柱の影響を全て『否定』、悪くなつた視界は嗅覚によりカバーし三次元的な空間を飛び回る。まるで足場があるかの様なその動きは飛ぶ、と言つよりも跳ぶと言つ方が正しい。

超高速で動き回りながら斧剣を振るい続けるが、それを神は衝撃波ショック波すら読み取り、未来予知の様な精度で全ての攻撃を紙一重で回避し、タイミングを狙つてカウンターを叩き込んでいく。

「ツーー！」

神の拳が妖始の頬を掠め、その余波により頬に口の中まで届く切り傷が出来るが、妖力を使い一瞬で再生させる。だが、たつた一瞬ではあるが、そこに出た明らかな隙を神が見逃すはずも無い。

「顕斎 うつしげわい

」

至近距離にいた神と妖始の間に見えない壁が発生し、妖始を吹き飛ばす。そして、そこで攻撃の手を緩めるほど神は甘くもなく、当然更に追撃が加えられる。

「解除ほぞく！！」

前に突き出された右腕から巨大な衝撃波が無数に打ち出され、全てが高速で妖始へと飛翔する。吹き飛ばされた直後で体勢が整つていなかつた妖始は、なす術も無く全弾に命中。弾幕の余波により辺り一面に爆煙が舞い。

「射殺す百頭ひゃくとう！」

止めを刺そつと接近していた神に、全方向から九つの斬撃が襲う。

「ハハッ！！」

だが、それすらも紙一重で避け切つてしまつ。神から漏れる笑いは自らの予想を超えた相手への喜び。神は殺し合つ度にさまざまな策を考え、強くなり続ける妖始とのこの時間を明らかに楽しんでいた。それ故の笑み。

そして、全力で技を放ち、今度こそ動けない状態の妖始に、止めとなる技を放つ。

「混まづかれ！」

一瞬の閃光。そして、その後には、ボロボロになり地に伏した妖始と、それを見下ろす無傷の神が残っていた。

否月妖始連敗記録七桁の大台に乗った瞬間だった。

「あの野郎、しこたま当てやがって……」

最近ではお決まりになつてきた午前中の全力での殺し合いもとい、一方的な虐めから数分後、体を再生し、次の殺し合いに向けて策を考える。

今回の射殺す百頭はかなり自信があつたんだが、あれで当たらないとなると……つうか完全に不意を付いた筈の攻撃すら完全に避け切るつて、それ何て最強の悪魔憑きだよ。……本当にパロつてないよな？あれの精神構造を神が真似するのは洒落にならない。

「大丈夫、だよな……？」

あれ？かなり不安になつてきた。実際、あいつは未来予知に近い形で俺の攻撃に反応してくるからな……別に一秒先の地獄を想つても何ら不思議じゃない。万が一、そうだつた場合はますます俺の目標一撃ブチ当てる、が遠くなつてしまつ。

「ん~、次はどうするかなあ

目標は高い方がいい、なんてよく言つが、俺の場合は一番低い所で既にエベレスト並だ。登る方の事も考えて欲しい。

妖怪の肉体と、それなりに生きた事で大きくなつた妖力のお陰で大抵の事なら再現出来る様になつてきたが、それでも神に一撃当てる事すらままならない。

そんな事を心の中で愚痴りながら、傍らに置いてある自分の得物に目を向ける。

この斧剣、こここの倉庫で発掘して以来、概念操作と言つ改造に改造を重ねた自重無しのかなりヤバい物だつたりするのだが、それを持つてしても当たらないのは、流石に理不尽じやなかろうかと思わないでもない。『命中』とかの概念も付けてる筈なんだけどな……。

「いつその事、避け様とする意思を『否定』する様にするか?……

でもなあ、普通に無視して動きそうだし……時間停止 は駄目だな。あいつは無視して動く。ならキングクリムゾンに多重次元屈折現象で射殺す百頭をブチ込むか……?」

ブツブツと新たな神対策を考えていく。

普通に考えればオーバーキルどころではないが、残念ながらここには常識人はいても普通の奴はいない。全員漏れなく人外だ

つと、誰か来たな。

「つたぐ、よくやるぜ。毎回ボコられてまだ懲りねえのかよ

そう言いながら、俺の隣に腰掛けるウリ君ことウリホール。

「違うな。毎回ボコられてるから、次こそボコる為にやるんだ

そう反論すると、ウリ君は理解できねえ、と肩を竦めた。

ウリエル。

『神の光』や『神の炎』を意味する名を持つ大天使の一人。作家と教師にインスピレーションを与えて、裁きと予言の解説者と言つ役割を持つと言わわれている。

その実体は目付きも口調も荒いが、天国で最も常識と良識を兼ね備え、裁きやら予言やらの他の奴らが面倒臭がつてしない仕事が回される苦労人。

『あらゆるものを燃やす程度の能力』を持ち、よく神を火炙りにしているのを見掛ける。ここに来たばかりの頃、修行中に神の奴が力加減を間違えて俺を宮殿にぶつけ、怒ったウリエルに存在ごと燃やされ掛けたのは今はいい思い出だ。当時はマジで死ぬかと思ったが。ついでに、クルミの師匠であり、俺が暇潰しで始めた絵を偶に助言を呉れたりもする。まあ、俗に言つヤンデレ。病んでる方じやなくてヤンキーの方の。病んでる方はルシファーだけで間に合つてゐる。

「で? どうかした?」

「んだよ。何か用事がなきゃここにいちゃいけねえのか?」

俺としては、そう言つ台詞そういちは女の子に言つて欲しいのだが……そんな女の子はない? 友人のハーレムにはいたぞ? ヤンキーなのに可愛い子が。その子関係で友人がゴタゴタに巻き込まれて、その後処理を俺がやらされたのはある意味テンプレ。地味キャラのだけど。まあ、それは置いておくとして、ウリエルが俺のここに来るのって用事がある時だけだった気がするんだが……。

「何だよ。別に修行中にガブリエルの奴が来たからコッチに来た訳じゃねえからな」

しばらくジトつとした目線を向けていると、相も変わらない不機嫌

そうな顔のままあつわつと面白いやがつた。ちなみに、ここら辺が俺や神にヤンデレ、もしくはツンデレ扱いされる原因だつたりする。だつて、なあ？

で、何故ガブリエル 通称、ガブちゃんさんがウリエルとミカさんことミカエルがやつているクルミの修行に参加するとウリエルがこちらに来るのか、それは全て「ウリエルがツンデレだから」の一言で片が付く。まあ、詰まりはそう言う事だ。

まあ、天然ジゴロ、鈍感、一級フラグ建築士など（現実にいる奴のみ）を嫌悪する俺としては、こんな風に誰か一人に惚れている奴は見ていて微笑ましいのだが、残念な事にこの関係を数千年以上続けていると言つのだから呆れた物だ。ぶっちゃけ、相思相愛な筈なんだけどなあ……。

「……そろそろ戻るわ。じゃあな

取り留めもない世間話や愚痴に花を咲かせ、それなりに時間が経つとウリエルはそう言つて、そそくさとクルミの修行に戻つていった。多分、途中で抜け出したのを気にしてたんだろうなあ。何となく落ち着かない様子だつたし。

「ん~、どうするかなあ

俺としては、もうこいつその事くつ付いてしまえばいいと思うのだが、こいつ言つ事に部外者が口を出しても碌な事にならないのは経験済みだし。

本来なら、遠くから眺めてニヤニヤする筈なんだが、ぶっちゃけあの一人は見ていて面白くない。とは言え、弄るぐらいなら兎も角、仲を取り持つのは専門外。

「呼ばれず飛び出すジャジャジャジャーン!!」

「アキラ君？」

どつかで聞いた様な台詞と共に地面から何かが  
こんな事する奴一人しかいねえよ！！今時漫畫でもない様な登場の  
仕方しやがって！！地面 いや、雲だけど、突き破つてくれ  
なよ！何だそのやり切ったみたいな顔は！？

ふう……さて、あなたの願い、叶えてしんぜよ~」

「はあ？」

地面から飛び出したかと思えば、何を言つてゐんだコイツは。俺の願い？ 強いて言へばお前に死んで欲しいうて事ぐらいたが。

「うん、素で言わると結構来るもんやね……」

「何しに来たんだよ」

—スル！？

知った事か。ひとつと用件を話せよ。ルシファーにお前が別の天使に手を出したって言つや。

「あ、勘弁してくれ。いやマジで」

マジで頭を下げる神。……標準語になるぐらいヤバいのか。色々と気にはなるが、知つたら戻つてこれなくなりそうな気がする。と言ふか、ホントに何しに来たんだ。

「うん、ぶつちやけあの一人見ててイライラするやつ?」

あの一人 ウリエルとガブリエルの事か。って、ちょっと待て。お前まさか……！？

「と言う訳で、あの一人をいい加減くつ付けよつ悪いつでな?」

「おい、やめろバカ……！？風に茶々入れるのが一番ヤバいんだぞ？！」

「……経験、あるん?」

「……察してくれ」

強いて言つなら若氣の至りだ。

「でもなあ

」

何かを言おうとして口を閉じる神。コイツにしては随分と歯切れが悪い。何やりかしやがった。

「 もうガブちゃん焼き付けひやつた 」

テヘッ、と自分で頭を小突いて舌を出す神。……このアホ、殺してやるつか。

「 て言ひつかマジ? 」

「 マジマジ。部屋に待機してもうひとつね 」

ホントに何やつてんの「トイツ！？」これもうあれじやん、完全にウリ  
エルに燃やされるフラグじやん！！

「じゃ、出来る限りやつてみよか」

「わづ好きに」 おい、この手は何だ

好きにしろよ、と書つ前に俺の肩を掴む神。……ぶつちやけ嫌な予  
感しかしない。と言つが良い予感なんてした事がない。

「いやあ、やつぱー」一瞬一時は人が多い方がええやん？

神は笑顔でそう言つが……

「本音は？」

「ウリくんからお仕置をされる時の道連れ」

ヤツパリかよ……予想はしてたよ畜生……

「離せ……俺は関係ねえ……」

「ハツハツハ〜。だ が 断 る……」

まあ、本気の神に俺が勝てる訳もなく、強制的に参加させられる事  
に……。

俺、今回の話が終わつたら旅にでるんだ……。

「で、どうするつもりなんだ？」

所変わって、俺とクルミ（殆どラファも）も使つていい部屋がある宮殿の中の一室 神の部屋。 そこの扉を開けると畳や日本庭園、ついでに鹿齋しがあつたりする屋敷だつた事には今更ツツコミを入れたりしない。 殆どは神「ハイツだからで説明出来る。集まっているメンバーは俺、神、ガブリエル。

ガブリエル。

「神の人」 「神は力強い」 などの意味を名に持つウリエルと同じく大天使の一人。 神の言葉を伝える天使であり、処女マリアにキリストの誕生を伝えた受胎告知は余りにも有名だ。 絵では基本的に優美な青年として描かれる事が多いが、この世界では女性。 銀髪ボニー・テールに吊り目の気の強そうな と言うか、気の強い美人さん。 ある一部が少々アレかもしれないが、あれだ、モデル体型つて奴にしておこう。 もし、それが原因で青年として描かれたのなら不憫過ぎる。 本人も気にしてるのに……。 能力は『言葉を支配する程度の能力』。 簡単に言えば言霊の強化版。 運命や現実まで捻曲げる絶対的な暗示。 最初に神の動きを止めたのもこの能力らしい。 当時の俺の命の恩人。

「そやねえ……ボクと妖始君が出していくアイディアをガブちゃんが実行する言づんはどーや？」

まあ、確かにガブリエルじゃ思い付かないから神の怪しきがる口車に乗つたんだろうし、コイツにしてはなかなかマトモな案だと思つ。 思うけど……逆にマトモ過ぎて怪しい。

「……けど、それぐらいしかないか……」

だが、いくつも怪しき死<sup>マサニ</sup>亡<sup>マサニ</sup>系統のフラグが立つてこなつと、他に案もない。……取り敢えず、『コイツが何か仕出かそつとしたら止める事にしよう。』

「……そうね、『ミユウル』の言つ通りでいいわ」

神の奴の案に乗る事に物凄い葛藤があつたのか、俺が頷くのを見てガブリエルはその整つた顔を顰めながら、贊同した。と、言つ事で、神の悪ふざもとい、恋愛相談が始まつた。……と、その前に一つ。

「トミユウルって誰?」

「えつ」

「あれ、言つてへんやつたつけ?」

……神の本名は『ミユウル』(自称)だった。

プランその一。発案者、俺。

「一緒に飯でも食いに行くつてのはどうだ?仕事はもう終わってるだろうし、酒でも飲ませたら変化あるかもしねないし

と言つ事で、ガブリエルにウリエルを食事に誘わせてみた。

『あ、ウリ。えつと、『ご飯でも一緒に食べない……？』

『いや、俺もう食つてきたから』

…………ドンマイ。そしてすまない。その可能性は考えてなかつた。ついでに勇気を出して誘つたのに断られて落ち込むガブリエルを慰めるのが大変だつた……。

プランその一。発案者、神　　ヒトテミコウル。

「ハツハツハ、アホやなあ妖始クン。ええか? いつ言つんは本能に訴えかけるんがええんやで?」

そう言つてヒミコ　　何か格好良くてムカつくから今まで通り神でいこう。神が取り出したのは　。

『…………』

ガブリエルに先程の服を着せ、ウリエルの部屋に待機させる事数分。その間、俺と神はずつと部屋の天井裏に潜んでいるのだが……いい加減帰つてもいいだろうか。

ガチャ

。

と、眞面目にこの企画から逃げ出そうかと考えていた時、扉が開かれ、部屋の中で顔を眞っ赤にしたガブリエルの全力の一言。

『お、お帰りなさいませ』主人様！』

キイー、パタン。

……多分、ウリエルには部屋の中の状況が理解出来なかつたんだろう。俺も、部屋の中にメイド服を着た知り合いがいたら同じ事をすると思う。

そう、メイド服だ。黒い服に白いエプロンドレス、更にミニスカート。頭の上にはフリルのついたカチューシャ。そんなもん着た知り合いがいたら誰だつて扉閉めるわ！！

おい、神。お前この状況予想してただろ。声我慢して笑い転げんじゃねえ。最初っからこれが狙いだつたのかよ……。

ガチャ

。

『お、お帰りなさいませ

』

バタン！！

そしてウリエル、いい加減に認める。現実だから、それ。

『……何してんだよ、お前』

ウリエルは僅かに扉を開き、中を確認する様にそこから顔を覗かせている。

『えっと、これは……その……』

「チイツ、煮え切らへんな。わつこつモササヒツモハズシの」「

「おい、サポート云々言つたのはゼリのゼリだよ。こんな状況に投げ込みやがつて。ヒザウカ、ブランモの」「終わつまつじやねえか？この流れは……。

『上のお前らもだ』

「…………」「

ばれてるへえ？何で？少なくとも気配を誤魔化して結界まで張つたのに……。

「あつ、」の宮殿の部屋は持ち主には侵入者が分かる様にしてるやつた

「そんな大事な事忘れるんじゃねえ！――」

しもた、なんて咳きながら眉間に皺を寄せた神を、ばれてるならわざわざ声を潜める必要も無いだつうと思いつ切り怒鳴り付けた。本当に何考えてやがるんだよ、こいつ

つて、一寸待て。

「俺、そんな機能聞いてないぞ」

「ああ。うそ、君の部屋には付いてへんよ。」アーフアがひょへひょへ行くやうと思つて

ありがた迷惑だこの野郎。と、見方によつては、と言つたが、ゼリ見

てもいつも漫才をしながら一人して天井から下りる。そこにいたのは、錯覚でも何でもなく、マジで炎を背負ったウリエルだった。

……ジーザス。

「で？ ガブリエルの奴は今日は一日、何か様子が可笑しかったが、手前が原因か

そう言いながら神との距離を徐々に詰めて行くウリエル。

手前ら、ではなく手前、と言う所に普段の行いの差が出ていると言つても過言ではないだろう。普段から人に迷惑ばかり掛けてるから、こう言う、少しばかり巫山戯ふきげていたにしろ、ガブリエルのために行動しようとした時にまで原因扱いされるんだよ。疑問系じゃなくて断言したからな。

「いや、えっと……その、な……」

流石に告白だの云々だのを言つ訳にはいかないと思ったのか、神も事情を言つに言えず、ジリジリと後ずさる。

さて、その状況で俺はと言えば。

「実は、俺達神の奴に脅されて……！」

「ちょ！？ そこはガブちゃん説得してボクを助けるゆー流れちゃうんかい！？」

「ハツ」

「鼻で笑われた！？」

俺が神を助ける？ バカ言っちゃいけない。俺はコイツに怨みは有つ

ても借りは殆ど無い。全く、とは言い切れないのがアレだが、その割合は俺の個人的な換算で言えば『怨み・借り=百・一』程度だ。まあ、どうせ死ぬ事もないんだし、別に見ても構わないだろう。

「ウリ、待つて!!」

と、俺が完全に傍観体勢に入った辺りで、今にも神を火炙りにせんとするウリエルをガブリエルの声が止めた。

「今日は……今回に関してだけは、主が悪い訳じゃないの」

多分、無意識だろうが『今回だけ』と言う部分を強調して言うガブリエルを見て、神は安堵と悲しみが混ざり合った、何とも言えない表情を作り上げていた。まあ、無意識に、って言うのが尚の事傷付いたんだろう。

「なら、何でお前はそんな格好してんだよ。神に<sup>ハヤシ</sup>駿されたんじゃねえなら、何だつてそんなもんを……」

「そ、それは……私が、私が……」

顔を赤らめて俯いてしまったガブリエルを前に、訝しげな表情をするウリエル。と言うか、何だこの展開。何でいつの間にかイベント発生してるんだよ。

この展開はアカシックレコードを使つていない神には予想外だったのか、状況に付いていけないと言う風な顔をしている。かく言う俺も似たような表情をしているだろうと思う。

だって昨今漫画でも見ない様な流れだぞ?この流れに見事に付いて行ける奴がいるなら出て來い。

未だに少しばかり俺の脳が暴走している間に、ガブリエルは決意が

固まつたのか、キッと顔を上げた。

「私が、ウリエルに嫌われると思つて……」

『（日和つた……）』

内心で愕然としている俺と神を余所に、二人の会話は加速していく。

「……別に嫌っちゃいねえよ。つうか、そんな事のためにそんな格好したのかよ」

「ち、違うの……い、今の間違い……」

「はあ？」

「わ、私は……私は……」

と、俺達が聞いたのはここまで。流石に、これ以上聞くのは野暮だろうと思い、神にアイコンタクトで意思の疎通を図ると神も同じ事を考えていたのか、浅く頷き返した。そして、俺達は一人が会話に集中している間に、そつと部屋を後にした。

結局、ガブリエルが告白出来たかどうかだが

。

「ねえ、今日一緒に飯食べない？」

「別に構わんが……」

「エヘヘ～」

と、嬉しそうに笑いながら腕を絡めているガブリエルと、鬱陶しそうに、でもどこか満更でもない様な態度で返事をするウリエルノ様子を見れば、結果がどうなったかは一目瞭然だらう。

そんな様子をボーッと、いつもの様にラファを胡坐を搔いた足の上に乗せたまま、遠目で眺めていると、隣に背中に黒髪の、どこと無くミカエルさんに似た雰囲気を持った巨乳の女性 ルシファーを背中に貼り付けた神が座ってきた。互いに何を言つでもなく、暫し、何をするでもない時間が流れしていく。そして、仕事をしているウリエルの背中に抱きついているガブリエルを見ながら、俺と神は全く同じタイミングで一言呟いた。

『人前でいちやついてんじやねーよ』

『アンタラが言つな……』

働いている天使達は総ツツコミだったそうな。



## 狼と死合と恋愛？（後書き）

はい、本当にすいません。今回の話、本当は冒頭の戦闘描写をメインにする予定だったんですが、それだけだとどうしても字数が足らず、それでふと思いついたオリキャラについての話でもやろうかと。そんな話が今まで出一番字数が多いのは秘密ww

そしてしつと神の本名登場。付けつもりは無かつたんですが、某会議室の流れでいつの間にか・・・・・ついでに神が使った技は皆大好きK-Fやmogenの『地 意思』さんから。でも、規模はダンチww

ちょっとした神の設定補足。神＝全並行世界の地球。取り敢えず、どこかに無事な地球があれば死なないとか。当然アカシックレコードの閲覧も可能。何を思つてこんな設定にしたし・・・・・。

誤字脱字や感想があれば是非！！それが作者の糧となる！！

次回こそ、次回こそ原作キャラ出しますからー！

## 狼と祟り神。実は幼女（前書き）

先に言つておきます。作者は西尾維新と奈須きのこが大好きです。

七月二十日、幾つか表現方法を改変。

八月一日、鳥氏の活動報告を見て髪の描写について確認した所、書き忘れている事を発見。急遽追記。

## 狼と祟り神。実は幼女

日が高く昇り、燐々と温かい日差しが降り注ぐ今日この頃。

そんな中を、黒髪の、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ目付きは悪い、中背中肉の地味と言つても過言ではない少年 俺、こと否月妖始は、バッサリと髪を切つた事で頭が随分と軽くなつたのを感じつつ、数千万年ぶりに踏む大地の感触を下駄越しに味わつていながら、襟元を緩くした白い袖広の着物に、それとは対照的な黒の袴と言う出で立ちで風を切つて悠々と歩いて行く。

この着物は人型になつた時に新調?と言つたが能力で仕立ててみた:のはいいが、この時代にこんな服ねえよつて事に気付いたのはもつと後だつたとさ。それからは開き直つて着続けている。

今は紀元前十数年と言つた所。人も多くなつてきたし、と言つ事で神の野郎から旅をする許可を得たのがつい一週間ほど前の話。それからは、風の向くまま気の向くまま行く先々で絵を書いて回ると言う宛のない旅に興じていた、と。

まあ、絵とは言つても天国にいた頃に暇潰しで始めた物で、ウリエルからは一生一流との評価を頂いた程度の物だ。流石に芸術を司るウリエルから言われてしまつて大分落ち込みはしたが、今はどうでもいい話だろう。

兎も角、そんな旅をしていた折、道中知り合つた人間の男からなかなか興味深い話を聞いた。

俺が今歩いている道は周りにはそれなりではあるが人通りがあり、この時代では十分賑わつていると言える。そして、この道が続く先にある物は一つ。その物こそ、男が一見の価値あり、とわざわざ俺に勧める程の物であり今の時代、この地域では知らぬ者はいない建物。

その名を

『洩矢神社』と言つ。

今回は、しがない旅の絵描きとなつた俺と、現在において最大の勢力を誇るミシャグジを一手に率いる少女との話だつたりする。

「とは言え、どうしたものか」

あれから十数分後、俺は件の洩矢神社に到着していた。してはいたが……。

「入る訳にはいかんよなあ……」

そう、未だに俺は境内には入つてなかつたりするのだ。

実を言うと、大昔にあのバ力バリュウが言つた通り、今の俺は訳あつて半ば神格化してしまつてゐる。半分は神になつてゐるとは言え、いや、むしろ半神半妖と言う何とも言い難い種族になつてゐるが故に、神社の敷地内にズカズカと入る訳にはいかないのだなあ、これが。

流石に神力の方は能力で隠してゐるが、中に入れば感知されるだろう違和感からただの妖怪じやない事ぐらいはバレるだらうし、神つて奴は基本的に繩張り意識が強い。妖怪なんぞが境内に入れば「ヒヤッハーハー汚物は消毒だーー！」と、世紀末のモヒカンの如く飛んでくるだらう。同じ神だらうと他文化の神であれば扱いについては大して変わらない。強いて言えば一方的な消毒から「よろしい、なら

ば戦争だ」へ変化する程度だ。まあ、民から信仰を集め、それを守る為には多少排他的になるのも仕方ないのかも知れないが。

何が言いたいのかと言えば、そんな所に妖怪でもあり神でもある俺が入るのは争いの種を蒔くだけで、平和で長閑な旅を望む俺としてはそんなものはごめんである。まあ尤も、この神社、石段なんかがある訳でもないので、敷地に入らなくても絵が描けるんだが。

「じゃ、始めるか」

能力で空間に穴をこじ開け、大分前から倉庫代わりに活用している空間からカンバスや筆なんかの道具一式だいぶつを取り出す。

この空間、あらゆる概念が存在せず、あのバカですら干渉出来ないビックリな空間だ。どんなに物を入れても問題ないし、概念がないだけあって入れた物はその状態から全く変化しない。何とも便利極まりない代物だ。何の力も持たない一般人が見ると発狂しかねない、と言うのが欠点と言えば欠点だが……正直、俺も何でこんな空間に繋げられるのかが今一つ分かってないのだ。本当に謎の空間である。まあ、そんな事はおいておくとして、あくまで他人の邪魔にならず、尚且つ鳥居の前と言う場所を探して、能力で周りからの認識を『否定』すると地べたに座り込む。

最初にやるのは下絵作り。下絵から始めるのは些こすれが時間が掛かるが、これ以外のやり方じや書けないんだから仕方がない。

（取り敢えず、今日は下絵を完成させたら宿を探そう。この分だと、完成までに何度も通う事になるだろうし、その期間中泊めてくれる所を探さなくっちゃな。……いや、待て。そんな所あるか？もしかして野宿？まあ、それでも困らないし、どうとでもなるか……）

簡単に今後の予定とも言えない様な物を立てつつ、改めて神社に目を向ける。

それで思つたのだがこの洩矢神社、今の時代にしては立派な建物だ。二十世紀の神社に勝るとも劣らない規模、何もない普通の日に集まつている人数を考えると、未来よりもずっと栄えていると言えるが……。

(いや、そりや当然か)

と、先程までの考えを自分で否定する。

未来の、特に日本では神なんかは迷信とされ、神社には全くと言つていいほど人が集まらない。集まるとすれば正月や冠婚葬祭の時ぐらい、か。

(当時は気にしちゃなかつたが、今思うとなかなか寂しい物があるな……)

しばらくはそんな取り留めのない事を考えながら筆を動かしていたのだが、ふと何やら視線を感じ顔を上げてみればいつからそこにいたのか、一人の少女が鳥居の向こう側にしゃがみ込んで俺の方を眺めていた。

金の髪を肩に掛かる程度で切り揃え、白い襦袢の様な袖口が広くなつている白い着物と、その上に袖の無い紫の衣を重ね着し、下は上と同じく紫色の、何故かミニスカートの様なヒラヒラした造り……時代に合つていないと言つたが妙と言つたが、何とも言えない独特な服装である。更によく見れば、紫の衣には蛙の様な刺繡まで施されている。

金髪に蛙の刺繡が施された服装……神社関係の渡来人か何かだろうか?

俺にとつてはラファエルやデミコウルの奴で見慣れた物ではあるが、金髪は今の日本ではそんなに見られる物じやないし、少なくとも純粹な日本人では金髪はありえない筈だ。

とまあ、そんな風に観察していれば当然なのだが、少女と曰が合つてしまつた。それも、そらせない程バツチリと。

「 「…………」「」

交差する視線。そして何とも言えない氣まずい沈黙。…………どうしよ  
う。

「ねえ」

「ん?」

どうやつてこの状況を打破しようかと頭を働かせていると、ありが  
たい事に少女の方から声を掛けてくれた。

年下に氣を使わせた様でいろいろと情けない様な氣もするが、改め  
て考えると、残念な事に俺は元々「いつ言つヘタレキャラ」だったので  
気にしない事にする。

「そんな所で何してるの?」

何つて、そんな事見れば……ああ、そう言えばこの時代にこんな道  
具はないんだつたつ。今まで聞かれた事なかつたけど……そりや、  
流石にカンバスの方を見れば分かるか。今まで皆物珍しそうに覗き  
込んでたし。

「絵だよ」

「絵?」

「ああ。大陸の向こうの道具でな。これで絵を描くんだよ

未来のだけど、と書つ言葉は、会つたばかりでそんな事書つても残念な奴だと思われるだけだと思つて心の中に留めて置く事にするとして、筆をクルクルと回しながら返すと、少女はへへ、と物珍しそうに俺の道具を眺め始めた。

まあ布に絵を描くなんて発想はないよなあ。何より勿体無いし。<sup>もつたい</sup>

「何を描いてるの？」

と、聞かれたので何も言わずに筆で神社を差しながら、今まで書いていた下絵に田を通す。

（んー、構図がずれたか。線も歪んじまつたし、書き直す……いや、いつその事スケッチからやるか？）

途中まで書き上げた所為で多少勿体無い氣もするが、ウリエル曰く、  
「つ言う物は妥協してはいけないらしい。」

まあ時間もあるし、俺としては別にどちらでも構わない。と、書つ事で絵の師匠の言葉ぐらいは聞こうと思い、先程取り出しておいた道具の中から鉛筆とスケッチブックを引っ張り出し、再び作業に取り掛かる。

「上手いもんだね」

「失敗だけどな」

トテトテと俺に近付き、地面に置いたカンバスを覗き込みながらそんな事を言う少女に苦笑いしながらそう返す。

近くに来た所為で思ったのだが、この少女、思ったよりも小さい。  
未来で言うならば小学生、どう頑張っても中学生……いや、中学生

も無理だな。表現としては少女、と言つよりも童わらべや幼女なんかの方がシックリ来る。

ラファエルと言い、どうも俺は幼い金髪の少女とは縁があるらしいが……どうせならもう少しばかり大人っぽい女性とも会つてみたい物である。

昔から子供には好かれていたが、まさかこっちに来てからも継続とは思わなかつた。これはこれで一種のフラグ体質なのかもしけないが、俺は口リコンじゃないのでありがたみはない。皆無と言つてもいい。

「ふうん。でも何でこんな所で書いてるの？」

中に入ればいいのに、と少女は顔を絵から俺に目を向け、不思議そうな顔でそんな事を尋ねてくるが……それは流石に白々し過ぎないか？ それとも本当に俺が境内に入る事の意味が分かつてないのか？

「まあ、ちょっとした事情があつてな。神様に嫌われてるんだよ」

尤も、これぐらいの子供なら神と妖怪の確執を知らなくとも不思議はない。ならば、わざわざ俺が教える必要もないだろ。だが、だとするとこれ程の力を持つた子に何も教育しないとは、洩矢の神はどう言つつもりだ？

俺は別に力を誇示している訳ではない。むしろ妖力や靈力、神力は隠している。だが、少なくとも能力で種族を弄らなければその類の関係者には俺が妖怪だと言う事ぐらいは普通に感知されるだろ。洩矢神社にて、僅かにだが力を持っているなら十中八九巫女か、はたまたその親族か。どちらにせよそんな子供が妖怪である俺に警戒もなく近付くとはなあ……。

巫女の教育は神や神職の仕事だろうに。そんな子供、妖怪からすればいいカモだ。いや、それとも自分に喧嘩売る様な奴はいないとか

言う自信か？もしそうなら尚の事境内に入りたくない。絶対に面倒な事になる。

「喧嘩でもしたの？」

首を傾げる少女の、何も知らない純粹な言葉に思わず苦笑いが漏れる。

大陸側の神には大抵喧嘩売つた  
いや、主に売られたが、  
日本の神にそう言った事はしていない。単純に妖怪だと言うだけだ。  
尤も、それでも妖怪なんぞ受け入れる物好きな神なんぞいないだろうが。

「大丈夫だよー。こここの神様は優しいからー！」

だと言つのに、少女はそう言つて朗らかな笑顔を浮かべると、俺の  
絵描きの道具を纏めて抱えて鳥居の中に入つて行ってしまった。

「……は？」

流石に予想外の展開に呆然。鳥居の向こうに笑顔を浮かべて「早く早く」なんて言つてゐる少女。

「……え？マジで？」

別に道具は能力で作り直せるが、どこか別の所に行こうものなら絶対追つて来るよなあ、あの子。

「……仕方ないか」

神様が優しいのは基本的に人間だけだ、と言つのは口に出さないで

おべ。

わざわざ子供の夢を壊す事もないだろう。それに、あの子に会つてしまつたのが運の尽きだと思い、諦めの感情から来る溜め息を一つ吐いて、ゆっくりと立ち上がる。

そして俺は鳥居へ ずっと俺を見て「口」を笑みを浮かべている少女の方へ向け、足を動かし始めた。取り敢えずは

「話の分かる神だといいなあ……」

鳥居を潜つた瞬間に襲われる事が無い様に祈つておこう。勿論、神カミではなくお世話になつた閻魔様に。

そんな事を考えながら、俺はもう一つ溜め息を吐いた。

「ちよつと待つでね」

数分後、少女は俺を神社の裏手にある生活スペース 母屋とでも言えばいいだろうか に連れて行くと、そう言って縁側から中に入つてしまつた。……俺と先程まで抱えていた道具を置いて。

取り敢えず、境内に入つた瞬間に攻撃を受けなかつた事に安堵しつつも、俺一人きりと言う神からすれば絶好の好機になつてしまつて。いる今の状況に冷や汗を流す。

何が怖いって、ここで逃げ仰せても日本にいる限り狙われ続けそつなのが怖い。

神って奴は大概敵には容赦がない。もしそんな事態になれば俺の周りにいる奴らすら巻き込むだろう。だとすると、あの少女には悪いが洩矢をここで殺しておくべきかも、なんて物騒な事を考えながら思考を入れ替えていく。

話は変わるが、俺には長い間生きた恩恵の一つに、マルチタスク分割思考と言つ物がある。その名の通り、同時にいくつかの思考をこなすスキルだが、俺は普段、このスキルによつて三つ程に思考を分けている。

一つ目は今の、所謂日常的な思考。二つ目は物事に対しても是か否かを選び、創造の為の設計図を作る能力専用の思考。そして、最後に

。

グシャツ  
！！

……いつ言つ奇襲すらも想定した、戦闘用の思考。

見れば、つい先程  
一秒前まで俺がいた場所には、見上げる  
程の、白くしなやかな印象を受ける大蛇が地面に喰らい付いていた。  
恐らくは、この大蛇が自然を依り代とした土着神  
ミシヤグジ……！

やはり、あの子がいない時を狙つて來たか。余程あの子の事が大事  
いや、違うのか？あなるほど、そう言つ事か。うわ  
あ、やつてられねえ……。

「あー、言葉は通じるか？取り敢えず、俺に交戦の意志はないから  
引いて欲しいんだが……」

事の真相に気づき、元から少なかつたやる気がゼロ通り越してマインスになるのを感じながら交渉に打つて出るも、返ってきたのは当

然の如く大口開けた大蛇の巨大な牙。

「聞く耳持たず、か……」

凄まじい勢いで飛び掛かつて来る大蛇を、溜め息一つと共に地面を蹴つて回避。それと同時に第二思考で頭の中から設計図を引っ張り出し、地面に着地するのに合わせて能力を発動する――

「『創造・存在肯定』」

ザザザザザ  
ツ――

創造は決してドイツ語とかじゃないからな。コレは能力であつて聖遺物ではありません、と。さて、戯れ言は置いておくとして、俺の前には先程の大蛇が巻局を巻いている。ただし、葛籠型の鋼鉄の檻の中で、だ。

「

檻に閉じ込められた大蛇は不気味な程に大人しく、見方によつては戸惑つている様にも見える。まあ、それもこの檻にはそう言つ仕掛けをしているから当然なんだが、その前に。

「そろそろ出てきたらどうだ?」

檻に閉じ込められている大蛇、その奥の母屋の陰に向けて声を掛ける。そこからヒヨツ「リと顔を出したのはさつきまで一緒にいた少女。だが、その頭には先程まではなかつた藁か何かで編み込まれた奇妙な形の……デフォルメした蛙の様にも見える帽子を被つていた。……マジで何だアレ。いや、本当に帽子か?

「あーうー、いつ気付いた?」

「……コイツが出てきた時から」

声を掛けられた事をキッカケに意識を帽子から外し、コイツの部分でミシャグジに親指を向けながら少女に答える。

まったく、と今日何度目になるか分からぬ溜め息を吐いてしまう。だが、それも仕方がないだろ。まさか

「お前がこここの神とは……なあ、洩矢サマ?」

俺の言葉に童姿の祟り神は、まるで悪戯に気付かれた子供の様な、実に愉悦しげな笑顔を浮かべた。

「そもそも、私の国に入つてくる妖怪って珍しいんだよね。十把一絡げの連中はまず近寄らないし、たまに来るのは力を過信して国で暴れようとする奴だしさ。でも、貴方は違うでしょ? とんでもない力を持つているのに何をするでもなく、ただ絵を書いてるだけなんてさ」

「それで興味を持つて観察していた、と?」

「そりだよ？」

あっけらかんと言い放つ少女  
た表情を浮かべてしまう。

今、俺達がいるのは、つい先程俺がミシャグジに襲われた庭にある  
縁側。そこで、俺は洩矢について先程まで行われていた茶番について  
の説明をさせていた。

簡単に事の顛末を纏めれば、洩矢が王を務める國 謹訪王国  
に妖怪が入り込んだのを感じ、その後監視していたが、その今まで  
の妖怪とは違う行動に興味を引かれ、神社の近くに来たのを期に自  
ら接触。更にミシャグジに襲わせて実力を試した、と。

結局の所、最初から仕組まれていたと言う訳だ。まさか、一つの國  
全てに力が届くとは思わなかつたが……流石は洩矢と言つたかね。

「じゃ、次は私の番ね。私も貴方には聞きたい事があるんだ」

「……まあ、ある程度ならな」

一通り説明させたんだ、こっちの事も説明すべきだろつ。……聞か  
れた事だけ、な。

「貴方は何？」

「…………」

おいおい……随分と直球に聞いてくるじゃないか。まさか一番初め  
の質問でそう来るとは思わなかつたぞ。まったく、洩矢には驚かさ  
れてばかりだ。

「妖怪だよ。分かつてゐるだろ？」

洩矢謹訪子を前に、俺は呆れ

「嘘だね。さつきのミシヤグジ閉じ込めたアレ、能力でしょ？アレを出す時に僅かだけど神力を感じた。……それはどう説明するの？」

……能力を使うと神力が漏れるなんて、俺も知らなかつたぞ？アレか、普段力を隠す事に能力を使つてはいるから別の対象に能力を使おうとすると力を隠している方から幾つか力が割さかれてる、とかか？……今後の課題だな、コレ。

それよりも、どうするかなあ。神力がばれてる時点で下手な言い訳や誤魔化しの類は使えなくなつたなが……いや、もうどうでもいいか。何と言つか、隠すのが面倒になつてきたり。

「まあ、半分ほど神だからな」

「ふーん……」

と、言つてあつたりカミングアウトするが、洩矢にそこまで驚いた様子は無い。

神力を使うと言つ時点である程度予想を立てていたんだろう。この見た目に反して聰い中身を持つてはいる神様ならそれぐらいはやるだろうな。一時とは言え、俺を掌で玩んだんだから。

と言つた、うえ天国に居た弊害だな、俺が力の察知が苦手なのは。あそこに居た奴らの力は地上に居る連中とは比べ物にならない所為で、地上に降りてからは感覚が狂いつ放しだ。コレもその内調整しておかねえと……。

と言つた、絶対気付いてやがつたよな、デミコウル神の野郎は。むしろアイツが気付かない訳がない。教えなかつた理由は……そっちの方が楽しそう、とかなんだろうなあ。

「まつ、そうなつた経緯とかも気になるけど、どうせ話してくれな

いんでしょう？

話さないな、絶対に。長いし面倒臭いし、何より「ミコウルの事を伝えるのがダルい。あんな奴の事をどうやって説明しろ」と言つんだ。聞かれたら困る知人ナンバーワンだぞ、アレは。

「ああ」

まあ、などと言つ事は心の内のみに収めて、ただ頷けば、それを見て洩矢は笑う。懐が広いと言つた、何と言つた……。

「あの檻は？ただの檻じゃないんでしょ？」

能力の内容は兎も角、檻の仕掛けぐらいなら別に構わないか……と言つか、質問にはしつかり答えておかないと引き下がりそうにもないし。

「あの檻には、それを壊そつとする意思や、抜け出そつとする意思を否定する様になつてるんだよ」

まあ簡単な能力の使い方だ。だが、簡単で単純故に破りがたい物でもある。それこそ、俺の能力を無視出来る様な実力、もしくは能力がないとどうにも出来ない。洩矢にもそれが分かっている様で、得心したとばかりに頷いた。そして

「じゃあ、次だね。ねえ、どうして避けられたの？」

恐らくは一番気になつていたのであるつ疑問を口にした。

「…………

「最初の攻撃、アレは間違いなく私に出来る最高の奇襲だった。私ですら避けられない位の……。貴方がどれだけ強くても、アレを避けるのは考えられない」

……さてどうしたものか。半分神だった事はある程度予想をつけていたんだろうが、こればかりは本当に分からない様でさつきまでとは打つて変わって洩矢の顔は真剣だ。

どう考へても、適当な答えは許されそうにない。とは言つても、これは別に答える訳にはいかない類の質問ではない。仕掛けを答えた所で、対処出来る様物ではないからだ。

だが、これは何と言つか、説明し辛い。何よりもそれその物がいや、そうだな。本家の、ある小説に登場する、灼熱の揺り籠の説明をそのまま流用させてもらつとしよう。正常な人間に近い体であつてすら、不死を謳う事が出来る、その理屈を。

「まあ……なんだ、要はスピードなんだよ。何かとんでもない事を経験した後、体や気分が高揚した事はないか？俺はそれを常に維持しているだけだ」

常に最悪を想定し、殺戮を夢想する。一度陥った地獄に居座り続ける。これが戦闘用の第三の思考の正体。

実の所、俺の妖怪としての性能事態、脚力や体力は兎も角として、それ以外は精々中級と上級の中間地點、その他は能力で誤魔化しているの過ぎない。

あの化け物と殺り合つ為には猿真似もいい所だが、こういつつのに手を出すしかなかつたのだ。

「例えばさ、一撃で山を碎く様な拳が回避不可な速度で迫つてくる

状況の危険度を十だとする。それに比べると、ミシャクジに襲われるの、俺にとつて三か四程度。そりや避けられるさ」

行動に移す前の準備運動、弛緩した精神を引き締める心の初動。それらを常に思考においておく。一度も止まる事無く、常に最高速。相手が最高速に達する前に、自らの性能限界で迎え撃つ。だからこそ、奇襲など通じる訳が無い。常に俺自身が奇襲を行つているのだから。

「それがあの攻撃を回避出来た仕掛け。窮地を駆け抜ける為の速さ。まあ、ちょっとした精神論だよ」

「……無茶苦茶じゃない」

絞り出す様な声でそう言つ洩矢の顔は、理解出来ないと言つ感情で止められている。

まあ、正直言つて俺もそう思つ。俺にこんな事が可能なのは、偏に分割思考マルチタスクと六千万年生きてきた経験のお蔭だろ。普通の人間がやれば間違いなく発狂物だ。

実践してこそ思うが、こんな事を元ネタでは人間がやつてていると言うから驚きを通り越して呆れる。そして、それを考えた作者がすごい。普通は考えねえよ、こんな事。

ともあれ、洩矢の質問とやらもお終いだろ。他に聞かれる様な事は俺自身にも覚えが無い、と言つ訳で洩矢に声を掛けてみる。

「なあ、もついいか?俺、今日の宿とかも探さなくちゃいけないんだが……」

「…………」

が、反応が無い。何をしているのかと、思い視線を庭先から横にずらしてみれば

「…………」

腕を組み、眉間に皺を寄せ何かをジッと考え方を集中している洩矢がいた。一体何を考え込んでいるかは知らないが、どうにも声が聞こえない程集中しているらしい。少々短慮かもしれないが、早めに行動に移らせてもらおう。と、言つ事で、

バシッ。

「あつひーーー？」

「おお……」

額を軽めに叩いたつもりだつたんだが、加減を間違えた様で中々い音が……いや、悪かつた。悪かつたから俺を睨むな。

「つか、話し掛けても返事をしないお前が悪い」

「ひひ……あーうー」

俺にそう言われると、洩矢は考え方を集中し過ぎていた自覚はあつたのか、所在無さ気に視線を彷徨わせた。まあ、別に怒つている訳でもないのでこれ以上何も言つつもりはないが。

それより、寝床なり何なりを探しに行く方が先決だ。今の時代、辺りが暗くなるのは早い。暗くなつても困りはしないが、獣類の相手は些か面倒ではある。

「で、俺はもう行つていいか?」

縁側から下りて、地面に立つ。暫く座りっぱなしだった所為か、腰を伸ばすとパキパキと小気味良い骨の音が聞こえた。俺も歳かなあ。……あ、俺六千万歳じゃん。

「あれ? 何か用事でもあるの?」

若干赤くなつてしまつた額を摩りながら、洩矢は不思議そつな顔を俺に向けてくる。

「寝床探しだよ。もう暫くもすれば暗くなるからな」

「あ~、そつか。そうだね……」

と、俺の答えを聞いてまた洩矢が俯いて何やら考え始めてしまつた。良からぬ事じやなければいいが……どうも、期待は出来そうにない。

「……ねえ、また絵は書きに来るんでしょ?」

今度は早めに結論が出た様で、顔を上げた洩矢が俺にそう尋ねてくる。まあ確かに、そう言つ予定ではあつたが……それがどうかしたんだらうか。

「なら、ついに泊まればいいよーーー!」

「…………

満面の笑顔でそれがいい、それがいいと言つてゐる少女を前に、俺は完全に動きを停止してゐた。

（今、コイツは何て言つた？ついに泊める？俺を？と書つか妖怪を？神社に？コイツ、正氣か？）

疑問符が飛び交う思考を放棄し、新たな思考を打ち立てる。洩矢の提案は、確かに俺としては願つたり叶つたりだ。一々寝床を探す必要も無ければ、すぐに神社を書く事も出来る。だが。

「俺、妖怪だぞ？ミシャグジから文句は出ないのか？」

そり、それが唯一の懸念だ。

流石に俺を泊めた所為で内輪揉めなんて言つのは気分が悪い。洩矢が神らしくないのは、まあ、俺を境内に自ら招いた事で十分分かっているし、コイツが良いと言えば、神社に泊まるぐらいはいいのだろう。だが、コイツに従つてゐるミシャグジ共は違つ。そう思つての心配だつたのだが……。

「私が出せざる訳無いでしょ？」

その心配を、洩矢はたつた一言でぶつた切りやがつた。どうやら、洩矢は結構な暴君の様だ。ミシャグジが泣いてないといいけど……まあ、そこまで自信満々に言つのなら、

「暫く、厄介になります」

そう言つて、家主に頭を下げた。……どうやら、暫くは寝床の心配はしなくて済みそうだ。

「でも、結局俺を泊めようと思ったのって暇潰しだろ?」

「ギクッ」

「そんなに暇なら信者の方に時間掛けろよ……」

「あ～う～……あつ～でも、息抜きって必要でしょ?」

「あつ、て何だよ、あつ、て。つか、お前今日一日ずっと俺とい  
たじやん」

「あつ～……いいの……神様なんだから……」

「……そうですか」

その後、二人の間でこんなやり取りがあったとか無かったとか。ついでに、会話の中で妖始が名乗つておらず、それについてまた一悶着あつたのは別の話だったり、そうでなかつたり。



## 狼と祟り神。実は幼女（後書き）

OK。何も言うな。分かつてはいる。その冷めた視線だけで読者諸君が何を言いたいかはよく分かつてはいる。だけど自重はしない！！さて、という事で原作キャラ一発目。洩矢諭訪子さんでした。この洩矢つてのが一発じや変換できなくて面倒極まりない。じゃ、今回の簡単な解説を。

- ・何か妖始が絵を描き始めた。

まあ、そりやウリエルとかもいるしやり始めてもおかしくないでしょう。まあ、作者がそこまで詳しい訳じやないんで細かい描写は出てきませんが。

- ・神格化して

これは今度説明。具体的に言えば諭訪大戦辺り。

- ・DDDネタ

作者が好きだから。特に日守秋星が好き。火鉢も好きだけど。2巻の「待たせたな、シンカー」の部分で毎回泣きそうになる。

- ・「文句は出させない」

ミシャクジ涙目（笑）

他に質問疑問誤字脱字、感想がありましたら是非とも。いや、正直感想とかがないとどう思われてるかが不安で不安で。あ、アドヴァイスとかも是非。でも叩きは止めて欲しかったり。

ではまた次回。

## 狼と祟り神。その日常（前書き）

更新遅れてすいません！！

約一ヶ月放置か……何やつてんだ俺……。

あ、後書きでちよつと報告が。

七月二十日、幾つか表現方法を改変。

## 狼と祟り神。その日常

朝、小鳥の<sup>さわぐす</sup>噂<sup>うわぐさ</sup>りと部屋に流れ込む冷氣で目が覚めた。季節は既に冬。この時代では珍しく木造であるこの『洩矢神社』だが、むしろ木造である為に非常に寒い。

一応、獣の皮で作られた布団もあるのだが、それでも寒い。保温性とかもあるはずなのに……。

生地が薄い所為か？まさかこんな所で羽毛布団の有り難味を感じるとは思わなかつたが、今度能力で作つてみるのもいいかもしない。普通の作り方？そんなもん知る訳無いだろ？

とは言え、それでも布団に包まつたまま出る気が全く起きないのは、獣の皮だとしても布団の魔力は健在だと言つ事か。冬場の布団、炬燵ほど恐ろしい物はないな……。

だが、俺は時代が違えばN E E Tと呼ばれる男、布団の魔力なんぞ恐るるに足りず！  
と言ひ訳でもう一眠り。

「何バカな事考えてんのさ。朝<sup>あさ</sup>飯出来たから起きなよ」

しようとした所で、部屋の横開きの扉を開けて、奇妙な帽子を被つた金髪の少女が入ってきた。

「……こんな事に神通力なんぞ使うなよ

と、言いつつ布団の中に頭<sup>かしら</sup>と潜り込むが、起きる起きるー、と言ふ少女に布団を持って行かれてしまう。

この少女、名を洩矢諷<sup>もじや すわい</sup>訪子<sup>すわい</sup>と<sup>い</sup>い、この神社に祀<sup>まつ</sup>られている神にして現在の日本において最大の信仰を誇るミシヤグジ<sup>ミシヤグジ</sup>岩や木を依り代とする白蛇の姿をした神<sup>の支配者である。</sup>の支配者である。

見た目はただの金髪の少女だが、実際には既に数百はとうに越している合法口り。おつきなお友達の夢が今ここに……！

「……寒い」

そして何よりも下らない。何だよ、おつきなお友達つて。……布団も引き剥がされてされてしまつた事だし、いい加減起きるとしよう。正直言えればまだ眠いんだが……と、そんな事を心の中でぼやきながらも、むくりと体を起こしガリガリ頭を搔いて欠伸を一つ。

「……おはよ」

「うん、おはよ」

そして日本人にとって馴染み深い挨拶を交わして、今日も一日が始まる。

俺が洩矢諭訪子と出会い、『洩矢神社』の世話に為り始めてから十数年。

そう、十数年だ。どう考へても俺みたいな奴が絵を描くのに掛ける時間じゃないし、俺もこんなに長い事世話になる積もりは欠片もなかつた。

なのに、何故かまだここにいる。ここに馴染んでしまつた、と言つ

のも無い事もないが、それは、あくまで最近になつて出来た理由だ。最初の頃は絵を描いたらまたすぐに旅に出るつもりだったのだが、それを事ある毎に諭訪子の奴は邪魔してきやがつたのだ。絵を描き始めれば暇だの何だと理由を付けて俺に相手させたり、逆に忙しいからと言つて風祝の手伝いをさせたり……。

今思えば、諭訪子の奴はただ単純に神としての生活に退屈していたんだろう。少なくとも数百年は同じ事を続けていたんだ、幾ら神とは言え飽きてしまつても可笑しくはない。そんな中に、色々と訳ありの俺が来れば、そりや退屈凌ぎとしては上等だ。

まあ、その後はずむずむと惰性で居座つて、現在に至る、と。

「つまり全部お前の所為じやねえか」

「あいたつー？」

客観的に今までの事を思い返してみて、取り敢えず前を歩く少女が悪いと言つ結論に至つた為、感情のままに頭を引っ叩いてみた。  
…された側からすれば理不尽以外の何物でもねえな。

「こきなり何すんのーーー！」

「こや、俺がここに来た時からの事を思つ出したからつーーー！」

「つこーーー！」

「さて、今日の朝飯は何だらうな」

「うわ、普通に無視した」

まあ、こんなやり取りも初めて所が、立場が逆になつたりで結構頻

繁に起こっているので互いに一々気にしちゃいない。諏訪子の方は内心結構根に持っていたりするのかもしれないが……祟り神だし。いや、祟り神云々は完全に偏見だけど。

「はあ……、妖始つて偶に訳分かんないよね……」

心外だ……と言いたいが、ここでの行動を鑑みると結構思い当たる節がある所為で反論できない。と言うか、さつきの事も諏訪子にとつては十分「訳分かんない」事に分類されるだらうしなあ……うん?俺つてもしかして変人扱い?

「つうか、何度も言うが俺の朝飯は用意しなくてもいいんだぞ?別に飯食わんでも死なないんだし」

「そう言ひ問題じゃないよ。家族なんだから一緒に飯食べるの当たり前でしょ?」

俺の言葉にこいつを見もせぬ答える諏訪子に苦笑いが零れる。これも事ある毎に      具体的に言えば冬や凶作の時によくやるやり取りだ。

今は年代で言えば弥生時代。

大陸から稻作が伝わり作物の保存が利く様になつたとは言つても、未来に比べれば技術も未熟でその時の気候に左右され易く凶作の場合はマジで死活問題。しかも、野菜の栽培方法は未だに伝わってない為、山や森にある木の実をそのまま食べている。

つまり、冬には食糧不足に為り易い。そんな時にまで食う必要がない俺は食わなくていいと何度も主張しているのだが、来たばかりの頃には「客人なんだから気にするな」、数年経つて居着いた頃には「家族なんだから」と言ひて首を縊に振つた例がない。

家族だと言つてくれるのにはありがたいんだが、妖怪を家族だと言つ

神様がどこにいるんだよ。

「おはよひびきます、妖始さん」

その後も特に意味も無い様な話をしながら居間へ向つた俺達を迎えてくれたのは、今の時代には珍しく長い髪をそのままストレートで伸ばした少女だつた。

彼女の名はを穂波。<sup>ほなみ</sup>顔立ちにはまだ幼さが残る物の、年の割りに落ち着いた少女であり、現在の風祝<sup>ふのぶ</sup>この神社での巫女である。因みに、彼女の両親は健在で、この『洩矢神社』とはまた別の所で生活している。穂波の母親も風祝だつたのだが穂波に風祝の役割を受け継がせて引退、今は旦那と二人でゆつたりとした生活を送つており、此方には祭事などで忙しくなる時ぐらいだ。

「おはよ」

いつもの様に明るい穂波に、氣だるげな表情のまま挨拶を返す。まあ、諏訪子が基本的に笑つてゐる事が多い様に、俺も普段からダルそうな表情だから別段可笑しな事もないんだがな。

少し前から気になつてゐたんだが、諏訪子。お前、何で偶に笑い声がケロケロに変わるんだ? あれか、洩矢神が蛙つてのはそこから来てるのか?

「?どうかした?」

俺の視線に目敏く気付いた諏訪子が疑問符を浮かべて首を傾げているが、何でもねえよと簡単に返す。

実際、気になつただけだし、別にわざわざ本人に問い合わせる様な類の疑問でもないだろ。別に諏訪子の笑い方がケロケロになつたつて何かが変わる訳でもないし。

「まさか私に惚れ

」

「それはない

「いくらなんでも即答過ぎるよねー!？」

何か諏訪子がふざけた事を口に出そうとしたので、言い切る前に諏訪子の言葉を遮る。

何かジットリとした視線を感じるが、そんな事は気にしない。気にしないつたら気にしない。無視していたら諏訪子が穂波に泣き付き始めたが、それも気にしない。むしろ気にすべきは諏訪子の方だろう。主に威厳的な意味合いで。

「はいはい、そろそろ頂きましょう。折角のご飯が冷めてしまいますよ?」

だが、すぐに穂波がパンパンと手を叩きながらしつらつしつらつ事によつてあつさり場は沈静化。

まあいつも悪ふざけだし、諏訪子も「そうだね」なんて言しながら平然と丸ちゃぶ台に着く。当然、さつままでの嘘泣き。コイツがそんな事で泣く様なタマカ。と言つたか、さつきの会話じや泣く様な要素がないしな。

「じゃ、頂きます」

『頂きます』

手を合わせて言つ諏訪子に倅い、俺と穂波も唱和して、箸を手に取り朝食に手を伸ばす。

本日のメニューは白米と木の実（十中八九どんぐり）の中身を簡単に燻つた物。

俺がここに来た当初は白米はそのまま出されていたんだが、流石に俺が耐えられなかつたので青銅器を使った簡単な飯盒<sup>はんじやく</sup>で炊き方を教える事に。

何でも、諏訪子の治める地域一帯では既に広まつてしまつてしているとか。

……米の炊き方が出来るのつて、いつ位からだらう。歴史、変えちまつたかもなあ。他にこのけやぶ台とか箸とか茶碗<sup>チャーポウ</sup>とかも全部俺が能力で出したもんなんだが……働いているのか？歴史の修正力の奴。……いや、アイツの事は敢えて気にすまい。そもそもアイツの存在 자체、俺でも把握把握し切れてないんだ。地球の化身としての役割もちゃんと聞いたわけじゃないし。と言つた、アイツの事は気にするだけでHPガンガン削られていく気がするし……。

「今日つて何か予定あつたつけ？」

「いえ、特には……。参拝の方も、こんなに寒いと来ないでしちうね」

「だらうね。妖始は？絵でも描くの？」

「いや、今日はやうにねえよ。お前が暇だと邪魔しに来るだらう」

「何よ、それじゃいつも私が邪魔してゐるみたいじゃない！？」

『…………』

その通りだらうが！と叫びたくなつた気持ちを堪えているのは、どうやら俺だけでなく穂波も同じ様で、その表情は何とも言い難く

歪んでいる。いや、よく耐えたと御つみ、お互に・・・・・。

パチ……パチ、パチ……。

朝食の後の居間に広がる静寂。そして不意に起ころる僅かな駒を打つ音。

こう言う空間は、個人的にはだが中々居心地がいい。相手に気遣う事なく自然体でいられる空間。まあ尤も、それももう少し盤面がマシな状態であれば、だが。

最近 とは言つても既に十年近く前の話だが、俺は能力を修行がてらに無駄にフル活用し、幾つか記憶に残つていた玩具を作り出していた事があるのだが、殆どは独樂や竹馬、縄跳びなどの懐かしく、尚且つ自然の物でも代用可能な外で遊ぶ為の物で、それらは既に諏訪子が統括する地域内の人里で子供達に使われてあり、現在『洩矢神社』に残つているのは当時俺が作った玩具 いや、

これについては玩具と言つていいのか不明だが、その中で、諏訪子の奴が偉く気に入ったソレだけだ。

パチ。

「むつ……」

諏訪子の放つ一手に、思わず動きが止まる。全体を睨む様にして頭

の中で幾つものパターンを試すが、どれも僅か数手生き残りえるだけか……。と、言つ事は、

「また俺の負けかよ……」

「アハハハ～、私の勝ち～……」

まあ、そう言つ事だ。

「それにして、面白いね。この将棋つて奴」

まつ、散々引つ張った挙句意外性も何もなく順当に将棋な訳だが、ここで軍人将棋辺りだと意外性があつたのか？まあ、そんなもん狙つても仕方がないんだが。

言つておくが、俺が弱い訳ではないぞ？単純に諏訪子が強いだけだ。最低でも数百年単位でやつてきた俺に対して、教えてからたつたの一、二年で勝ち星を奪うとかどんな化け物だよ、つたく……。

しかも最近は連敗気味。完全に打つ時の癖やら思考を読まれまくつて嫌になる。もう打つの止めようか、と思わないでもないんだが、俺自身将棋を打つのがそれなりに好きなので負けると分かつていてもやつてしまふ、と。

いつその事、新しいゲームでも出そうかと思わないでもないが、残

念な事に俺には囲碁のルールが分からぬ。ぶつちやけ、自由度が高すぎてどうすればいいのか分かんねえんだよなあ、アレ。

そんな訳で、囲碁は除外するとして今度はチエスでも出してみようか、と考えてみたものの、結局似た様なボーダゲームだと、その内連敗しだすのは田に見えているので自重。と言つかもしろ自嘲。

「 もう、もう一回やる、もう一回 」

「 うへえ…… 」

満面の笑みで次を催促してくる諏訪子にげんなりする。

何だ、そんなに俺を負かしたいのか？普段の恨みか？もうやらねえよ、ちくしょー……、なんて考えていても、負けず嫌いが祟り結局もう一局打つ羽田になるのは田に見えている。……まあ、それに、

「 」

笑顔で何かのリズムを鼻歌で奏でながら、駒を列べる諏訪子を見ていると、どうにも

（ 断れないよなあ…… ）

まあ、断れないなら仕方がない。次は精々勝たせてもりえる様に頑張らせてもらおうか……負けたくねえからなー！

「一日将棋に使つちまつた……」

いや、一日中将棋指してた事は別にいいんだけどな、一桁やつて勝てたのが僅か一、二回つてのが何ともなあ……。

（多分、この先将棋でアイツの優位に立てる事はないだろ? なあ。  
これが才能の と言つか、性能の差かねえ……）

そう考えて徳利 居酒屋の熱燗で出てくる奴じゃなくて、壺に細い口が付いた様な持ち運び出見る奴 の酒を煽る。  
嫉妬だの何だのなんて感情は微塵もない。そこら辺の感情とは、まだ人間だった遠い昔に折り合いを付けている。それに、少なくとも見た目は子供である諏訪子に嫉妬するのもバカらしい話だ。

「今夜は明るいなあ……」

空を見上げれば既に月が高くまで昇り、影を照らしている。その月を眺めつつ、また徳利から酒を一口。  
何やつてるのかと言えば、ただの月見酒だ。  
酒は能力で少しでも残つていれば増やせるし、うむ、便利便利。  
母屋の縁側でやつてている所為で、流石に少々寒いが……まあそれも風流つて奴にしておこひ。実際にはそんなもんを解する程の学は無いがな。

「誰に言つとるんだ俺は……」

自分の考えている事に自分でツツコミを入れると言つ、普通のボッ

チよりも寂しい事をしている自分に苦笑にしつつ

「もう寝たんじゃなかつたのか？」

俺の隣に腰掛けた諏訪子へと声を掛けた。

「アハハ、妙に目が冴えちゃつて……ちょっと付き合わせて」

「コイツ、最初つから酒が目的かよ。まつ別にいいんだけどな。ほれ、と徳利を渡してやり、徳利に口を付け中の酒を呷る諏訪子を横目に月を眺める。

交互に徳利を呷り、月を眺め、たまに一口で飲み過ぎだの何だと騒がしくならない程度に口論して、またうだうだと文句を言い合いながら徳利を呷る様な、そんな穏やかな、俺の好きな時間。

「だから飲み過ぎなんだよ、お前は」

「幾らでも造れるんだからケチケチしないで……クシ

「ウンシ」

と、もう数回田になる言い合ひを諏訪子としていたのだが、いつも紫の衣じやなく寝巻き用の白い单衣の着物を着ている所為で冷えたのだろう。俺はむしろ酒で火照つている所為で涼しいぐらいなんだが、諏訪子が小さくしゃみをした。

寒くなつたんならいい加減寝ればいいと思つんだが、それでも諏訪子が立つ様子はない。

「つたぐ、仕方ねえなあ……」

「おつ？」

ズルリ、と久々に尾を出し、それを諏訪子に巻いてやる。

皆忘れているかもしねないが、一応はこれでも狼。体の一部だけを妖怪化する事なんてお茶の子さいさいですよ、ハツハツハ。

と言つた、最近ご無沙汰だつた所為で言い忘れていたかもしねないが、この尻尾、かなり使い勝手がいい。

まだ狼の姿のみだつた頃には単純に長く、木でも切り倒す様な強度を持つと言つだけだつたのだが、人型になつてからは、長さは自由自在、更には籠めた力によつて刺突や斬撃まで繰り出せる様になつたり、と非常に便利な武器の一つになつているのだが・・・・・うん、武器無しだと尻尾の攻撃力が一番高いつて言うのも我ながら中々おかしな事になつてるなあ。

「あ～う～、妖始の尻尾温かいね～」

「よかつたな、そりや」

俺の尾に頬擦りしながら顔を綻ばせる諏訪子に適当に返事をしながら、また徳利に口を付ける。

（まあ、たまにはこんな風に終わる田もあつていいだらつ。どうせ、すぐに忙しくなるんだし……）

そう思いながら空を見上げると、綺麗な満月が、相変わらず俺達を優しく照らしていた。そしてこれから僅か数年後、本当に危機が訪れるのだが、今の俺はそんな事を知る由もない事である。



## 狼と祟り神。その日常（後書き）

ほのぼののつて書つよりもダラダラつて感じがする妖始と諏訪子の日常編でしたwww

諏訪子フラグは立つてないよー。間接キスとか気にしてないよー。

それと報告。

暫く小説の更新が今以上に遅くなります。

理由としては、現在作者は高校三年生として。いい加減勉強しなきやなんなんー、と。現実逃避にチョコチョコと書いていく予定ですが、それでもこれ以上遅筆になるのは田に見えていたんで、報告を。

感想、誤字脱字、批評批判、アドバイスなど、どんどんお寄せ下さい。それが作者の糧になります。

それでは、また次回ノシ

## 狼と祟り神。対峙するは軍神（前書き）

一ヶ月オーバー……うわあ……。

### おわび

約一話ほど前で主人公のスキルの一つとしてDDDの日守秋星の精神論を使いましたが、不愉快に感じたDDDファンの方もいると思います。申し訳ありません。作者も一DDDファンとして使った事を後悔しております。

ですが、かなり重要な設定として使つてしまつたのでいまさら変更する訳にもいかなくなり……。

ですが、せめてもの償いとして、今後この作品にDDDの設定が使われていた事が汚点にならないよう、さらに読者様が不愉快を感じない様精進させていただきますので、どうかご容赦ください。

## 狼と祟り神、対峙するは軍神

『高天原の神が信仰を広げている』

そんな話を聞いたのは、つい最近の事だった。  
それを聞いた時、最初に「やはり来たか」と顔を顰め、そして「こんなに長居するつもり無かつたのにな」と苦笑い。

高天原の神が日本で広がりだしたと言う事はそろそろ三世紀、つまりは古墳時代。そして『倭國の王』を中心とした『ヤマト王權』の始まり。

高天原の神 言つならば、それは『日本神話』に登場する神々だ。

五柱の神からなる別天津神、その名の通り七代の神、神世七代、最後に伊弉諾尊と伊弉冉尊。それらの神が高天原で生まれたとされる『天地開闢』。そして伊弉諾尊と伊弉冉尊による『国産み』と『神産み』。

大凡、この二つの出来事から始まつたとされる神話。それが『古事記』、『日本書紀』に掲載されている『日本神話』だ。

中でも、天照大神、月読命、素戔鳴尊の三柱の名や、天照大神が引き籠もつた『天岩戸』は未来でも知らない奴は中々いないだろう。厨二病患者なんかは特に。

そして、未来で言う所の奈良県から『ヤマト王權』の支配と共に広まりだした新たな神の信仰は爆発的な勢いで勢力を広げていき、俺達のいる諏訪地方 長野県まで迫つてくるのに然程時間は掛からなかつた。

そもそも、俺の知る限り諏訪の地に祀られているのは軍神、農耕神、狩猟神、さらには風神として信仰されていた『建御名方神』だった。それに龍氣にではあるが、どこかの伝承でも諏訪の洩矢神は侵略を受けて敗北した、と書かれていると聞いた覚えがある。

と言つ事は、遅かれ早かれ、諏訪の地に攻め込んでくる事になるだらう。

「で？ わざわざ何の用だ、洩矢」

と言つか、今日の前にその神の内の一柱がいたりするんだが……それも物凄く特徴的な奴が。

紫がかつたショートボブ（にしては豪くボリュームがある）の髪と、首元に掛けたれた鏡と言葉では表現し辛い装飾が施された半袖の赤い衣とその下に着てているらしい長袖の白い着物？ と言い、さらには赤みを帯びた黒色の袴と言い、今まであつた事のある人外主に悪魔や諏訪子を含めた神々はどいつもこいつも時代にあつていな奇妙な格好をしていたが、目の前にいる人物はその中でも格別だ。今まで言葉に困る事はあっても、表現出来ないなんて事はなかつたと言つのに……。

「そんなの聞かなくても分かるでしょ、やさか八坂」

現在の状況説明。

広間の様な所の真ん中で座る諏訪子。

その諏訪子の左斜め後に控える様に座つてている俺。

そして俺達の前で偉そうに頬杖突きながら胡坐を搔いている奇妙な格好の女性、『八坂』 かなこ『八坂神奈子』。

さらに壁際には俺達を取り囲む様に数十の神々がズラリ。

簡単に言えば敵陣ど真ん中。戦力は俺と諏訪子。向こうは『八坂』

+ その他大勢の神の皆さん。

……普通に考えると無理ゲーじゃねえか？ いや、ここからならいつでも逃げ出せる自信ならあるぞ？ それでも、せめてミシャグジは連れて来いや。

そう思つてここに来る前に聞いた所、「妖始がいればどうにかなる

でしょ、壁とか」なんてありがたい言葉を頂き、お礼に引っ叩いたのは完全な余談。

さて、何で俺達がそんな敵陣真っ只中にいるのか。その理由は別に難しい事でも何でもなく、とうとう諏訪の地にまで信仰を広げようとする動きを見せ始めた高天原の神々と不可侵条約の様な物を結びにきたのだ。様な、って言うのは単純にこの時代にはまだ条約なんて言葉が無いからで、特に深い意味は無い。

と言うか、『建御名方神』たけみなかたのかみじゃないんだな、名前。まあ、女って言うのは予想してたよ。洩矢も女だったし。

「私達は貴方には手を出さない。だから私達にも手を出さないで」

俺達 と言つた、諏訪子の言い分はただこれだけ。諏訪子の奴もこれ以上信仰を広げるつもりは無いらしく、それ以上に神々の争いに信者達を巻き込む訳にはいかない、だそうだ。  
まあ、諏訪子クラスの神同士がマジでぶつかれば、その被害は計り知れない。故に、諏訪子の判断は一土着神としては決して間違った物では無いし、むしろ正しい物だと思う。

「断る」

それを、八坂はにべも無く切り捨てた。

「何故……！？」

「何故？そんな事も分からないか洩矢。そんな物、こちちらに利点が無いからに決まっているだろ！」

諏訪子がいきり立つのも気にせず、八坂は呆れた様に言い放つた。だが、それこそ何故だ。

少なくとも、諏訪子の勢力は今の日本では間違いなくトップクラス。そんな諏訪子との不可侵条約。それを呑みさえすれば、一番厄介な相手と敵対する事無く日本全土に信仰を広げられる事になる。普通ならば、これは十分な利点となるはずだと呑うのに、それを断つて諏訪子の率いるミシヤグジ信仰と争う利点……ダメだ、思い付かん。そもそも、俺はこう言う交渉事に関しては素人もいい所、思い付かなくても仕方ないだろ？ だが、それなりの場数を踏んで来たはずの諏訪子までもが俺と同じ様に露骨に顔を顰めてしまっているとは……八坂の奴、一体どう言つて見だ？

「ふん、高たかが知れるな洩矢。いや、妖怪とつるんでいる時点で既に、か？」

ニヤリと口の端を上げた八坂の言葉に、周りの神々から嘲笑が漏れるが、諏訪子にそれを気にした様子はない。あくまでも冷静に、八坂の真意を読み取ろうとしている。

一応、俺がここにいるのは高天原の情報収集おこなを行つていた穂波に、諏訪子のストッパーの役割を任せたつて呑うのもあるんだが、この分なら必要なかつたんじやなかろうかと思つ。と言うか、むしろ付いて来た事で挑発の材料を与えてしまつている気がするんだが……。

俺がそんな事を考えていると、再び口を開いた八坂は、とんでもない事を言いやがつた。

「第一、貢物も無しに攻め込むな、だつて？ 随分と都合のいい事を言つじやないか、洩矢」

『……は？』

予想だにしなかつた言葉に、俺と諏訪子から間の抜けた声が上がる。

今、八坂は何と言った？貢物？不可侵条約で、貢物だと？

「私達には洩矢を避ける理由なんてないんだ、貢物ぐらいは当然だろ？」「

極当たり前の事を、極当たり前に口にしたのだと、八坂の表情はそう物語つていた。

つまりはアレか、八坂は洩矢やミシャグジ信仰なんかは眼中にないと、そう言つているのか？

（ハツ、分からねえ訳だ……）

そもそも前提からして間違つている。

今回の談合、諏訪子は八坂を、穂波の集めた情報から同格、ないし僅差で自らが上だと判断して臨んでいた。

信者の量やその信仰心の密度、そして単純な戦力。それらの差はほんの些細な事で入れ替わる程僅差。戦争が長引くのは、基本的に互いの戦力が拮抗している時だと決まつている。

諏訪子のミシャグジと八坂の神の軍勢、それらが長期間ぶつかり合えばどうなるか。少なくとも、土地も民も只では済まないだろう。そう判断したからこそ、諏訪子は八坂の元へと赴いた。不可侵条約を結ぶ為に。

だが、八坂達は違う。彼女等は諏訪子は取るに足らない格下と判断した。その判断が調査した上でのものなのか、それとも今まで土着神を侵略し、下してきたが故の慢心なのか……いずれにせよ、八坂達は完全にこちらを讃めているのは間違い無い。

ブチリ。

その時、何かが切れる音がした。それも、俺からじゃなく、諏訪子

から。

いや、そもそも諏訪子が今まで八坂の言葉に何の反応も示さなかつたのは、それが挑発だと思っていたからと言つ部分が多い。それが自分を怒らせる為の言葉だと、そう思つていたからこそ、諏訪子は冷静に耐えていた。

だが、それが全て本心で、本氣で虚偽にうけされていたのなら、そしてそれを理解したとしたら。

ゾワリ、と諏訪子を中心に不可視の力が広がつていぐ。

( そりゃブチ切れるよなあ！… )

恨むぞ八坂、面倒な事してくれやがつて……！！

心中で舌打ちする俺を余所に、深海にいる様な重苦しい空気が蔓延し、静かに、だが明確な怒りを伴つた祟り神の禍々しい神力が場を侵食していく。

いや、神力の方はあくまでも意識している訳じやなく無意識に漏れ出しているだけ

つて、それどころじゃねえな。

壁際に座つていた奴等の殆どは諏訪子から漏れ出した力に完全に腰を抜かす、もしくは気を失いかけている始末。その点、僅かに瞠目しただけの八坂は流石と言えるが……と言うか、こんな中で平然としてる奴の方がよっぽどおかしい。

俺？どう考へてもまともじやねえだろ。それ位は自覚してるつて。と、それはさて置き、そろそろ止めないと不味いな。ここやり合うのは色々と面倒な事に……なるか？

諏訪子の神氣に中てられて殆どの神がダウンしてるからまともに動けるのはほんの数人。その程度なら一度に相手出来るし、一番の脅威だつた数の暴力もなくなつていいんだが……いや、それ以前にこじり駄目か。諏訪子の奴、今回はあくまでも会談だつて言つて奥の手も持つて来てない。

少なくとも、俺は最初からこの一件の回避は無理だつと思つてい

た。そりやそうだ、俺が洩矢神社にいたこと以外は何一つ世界に変化が無いんだから。

幾ら諏訪子が家族同然に扱つてくれたとしても、元々部外者であり妖怪である俺は今回の一件が戦争になつても諏訪子の陣営として参加出来ないし、するべきではないと思う。そもそも、本来なら俺はここにいるべきでないとすら思つているのに。

だが、だからと言つてこのままなら負けると分かっている諏訪子を放つておける程物分りもよくない。

だから、せめてイーブン。それぐらいまでは、勝率を調整させてもうらう。

（…………だから、ここにやり合つてもうつちや困るんだよ……）

パン、と拍手を一つ。それで諏訪子の怒りを『否定』する。あくまでも変化しやすい一時的な感情だ、その程度なら簡単に能力で干渉出来る。……それでもあまりに感情がデカ過ぎて若干厳しかつたが、取り敢えず、これで諏訪子の方は問題無い。冷静さを取り戻したからか、既に部屋に蔓延していた神力も引っ込めていく。さて、ここからは少しばかり俺の仕事だ。

素人がどこまでやれるかは分からんが、八坂が乗つてきてくれる事を祈ろう。勿論、デミュウルなんかの他称神自称地球意志なんかじやなく、以前会った閻魔様辺りに。

「八坂さま」

「…………何だ妖怪」

今まで黙つていた俺が口を開いたからか、八坂の表情に僅かな猜疑心が宿る。

だがまあ、一言田から黙れなんかの言葉が無くてよかつたつて所か。少なくとも、話を聞く気はある様だ。

「今の見ても、洩矢サマの評価は変わりませんか？」

俺の言葉にピクリと、僅かにだが確かに八坂の眉が動いた。

「分かつていいでしようが、洩矢サマはまだ本気じゃない。先程のはあくまで抑えていた力が漏れ出しだけ。それだけで、洩矢サマはアナタの部下の殆どを行動不能にしましたが……それでも、洩矢サマは今までアナタ達が侵略してきた十把一絡げの神々と変わりませんか？」

八坂は俺の言葉に露骨に顔を顰めしか、壁際でグロッキー状態にしている自分の部下達を一瞥してフンと鼻を鳴らすと、

「そうだな……確かに、今までの輩とは違うよつだ」

「…………」

「どうした、いつ言つ答こたえが聞きたかったのではないか妖怪

その言葉に面食つてしまつた俺に八坂がニヤリと笑うが、正直、こつもあつさりと諏訪子への評価を覆すとは思つてなかつた。

部下の名譽を守るためか、それとも冷静に公平な判断を下せるからか……どちらにしても、ただの傲慢で相手を見下す訳じやない様だ。と言つ事は、今までの諏訪子への態度については戦つてきた土着神かぶねがを鑑みての評価だったのか。

……実はいい奴なのかも知れない、と言つも可能性が頭に浮かんだが、それ以上に性格が悪そだ。それに、もつと別の思惑だの何だ

のあるだけかもしれないし、いくら考へてもあくまで可能性でしかないので保留、今は俺のすべき事をしよう。

「だが、諏訪の地を奪う事を撤回しない、これは決定だ」

撤回してくれれば楽なのに、と毅然とした態度の八坂に溜め息を吐く。まあ、流石にそつちは最初から期待してなかつたが。

「では……」しげせんか？戦闘は八坂サマと洩矢サマの一対一。勿論、規定は無し。場所は諏訪の地。互いの神に被害が出ず、どちらが上かを決めるのには、ちょつといいとりますが

これが<sup>あらかじ</sup>予め俺が考へていた策とも言えない様な策。愚策の中の愚作とも言つていい代物だ。

「話にならんな」

当然、八坂からは鼻で笑われた上に切り捨てられる。だが、それは予想済み。と言つか、諏訪子の要求すら通らなかつたのに、こんな洩矢陣営にしか利点がない様な要求が通るだなんて思つちやいない。

「そうですか？八坂サマの部下の神々、こんな状況で戦いになりますかね？元から攻め込むつもりだつたんですから諏訪の地で、と言うのも可笑しな話じやないじやないです。こちらとしては、ただ悪戯に地を荒されるのを避けたいだけですよ。それに……」

「……何だ」

「……これぐらい受け入れる度量を見せてみろよ、この程度の不利、<sup>くつがえ</sup>覆してみろよ、軍神・八坂神奈子」

口八丁手八丁、戯言にすらならない屁理屈。挑発になつてゐるかも怪しい言葉の羅列。

むちやくちや言つてゐるのは自覺してゐるが……悲しいかな、俺にはこの程度しか吐ける言葉がない。この時ばかりは自らの言語力の低さを憾むぞ。

「安いな」

と、俺の言葉に八坂はそう答えた。あまりにも安い挑発だと。やはり俺じゃ力不足だつたか、と内心舌打ちしたい気分になりながらも、次善の策をいくつか頭の中で用意していく。

「それと、有利な状況を作り出すのも軍神の勤めだ。覚えておけ阿呆。だが

八坂はふん、と詰あらなさ氣に鼻を鳴らしたかと思えば、にやりと口の端を上げて、

「いいだろつ。乗つてやるよ、その詰

俺が予想もしていなかつた事を口にした。

周囲の神々が『八坂様！？』と声を上げるのも耳に入らず、俺はただ、考えを張り巡らせていた思考が停止しさせていた。それはもう見事に。

「いいじゃないか、望み通り真正面から潰してあげるよ

神様は願いを叶えるものだりつ？

八坂はそう言って、さらに深い笑みを作る。

その言葉は、自らの力への絶対的な自信か、はたまた先ほどの一件から諏訪子の力を推測した上での判断故か・・・・・。いや、どんな理由であれ、話を呑んだ事には変わりない。

（ああ、確かにアンタは諏訪子と同じで並じゃねえよ、八坂……）

今はただ、明らかに自分が不利になると分かつていて尚、話を呑んでくれた八坂に心の中で敬意を表しつつ、最後に、

「三日後、洩矢神社だ。そこにアンタと諏訪子の戦場を用意してお

く

「いいだろ？、精々回りに被害が出ない様に神様にでも祈つておきな、妖怪」

そう言葉を交わし、俺と、それに合わせた諏訪子は席を立ち、その場を後にするのだった。

## 狼と祟り神。対峙するは軍神（後書き）

超難産 www 原作キャラとの会話超キツイっす www

神奈子様の会話は風神録魔理沙ルートを参考にしました。と言うか、カツコよくなりすぎて作者がビックリ www

そして主人公凡人化。いや、正確には最初から凡人です。戦闘スペックと能力以外は基本的に凡人。作者基準の凡人なので違和感を感じす方はいらっしゃるかもしれません、こればっかりはどうしようも・・・。以前、感想で弱くなつた、と指摘され、そんな事ありませんよと答えたのですが、申し訳ありません。前言撤回、能力などの細かい独自設定でどう考へても改定前より弱体化しております。それらの設定も、また次回あたりで。

そして後半諏訪子様が空気になつてしまつて反省。でも次回見せ場あるよ！主に諏訪子様と神奈子様！！主人公？ああ、そのうちあるんじゃね？知らないけど www

と言う事で、謝つてばかりの一話でした。また次回ノシ

狼と祟り神。決戦前夜の晩餐（前書き）

眞面目に書いて一ヶ月オーバー www やっぱり会話文は苦手です w  
w

## 狼と祟り神。決戦前夜の晚餐

軍神・八坂神奈子との会談から一日間、俺達 俺、諏訪子、穂波の三人は決戦の準備の為にそれぞれ東奔西走していた。

決戦の当事者である諏訪子は奥の手の準備、その後は力を蓄える為本殿に引き籠もり、穂波は何か考えがあるのか諏訪王国を飛び回っている。

さて、そんな中で俺が何をしているかと言えば

。

「……これで最後だな」

ふつ、と短く息を吐くと共に手に持つている一本の刃渡り三十センチ程の小刀を突き立てる。

俺の仕事は諏訪子と八坂が全力でやり合える場所を作る事……そして、真っ白な、反りが無い諸刃の刀身に、鍔も付けてない質素なデザインの小刀それを設置していくのが結界を張る為の準備。

今俺がいる洩矢神社の裏に広がる森には、巨大な円を描く様にして小刀を等間隔に設置されている。

この刀の刀身、大昔に抜けた俺の歯を削り出して加工した物であり、長い時間を経て『固定』と言う概念による概念武装になつていて。犬歯から削り出した、小刀の刃渡りを一メートル前後まで伸ばした様な剣が『斬る』に特化している辺り、恐らく歯としての役割がそのまま出ているんだと思うが、今回その中でも犬歯を除いた刀

総数三十八本、それら全てを使用して結界を開拓する。

結界には靈力を使う……と言うか、それ以外に結界として活用できる力がねえんだよ、残念な事に。

それぞれの力には特性がある。共通点と言えば精々圧縮してそのまま打ち出せる程度。

妖力はもっぱら五行や四大元素に変換したり幻術などによる妖術、

靈力や妖力の上位交換たる神力なら使い方次第で結界も張れるが、純粹な神と言う訳でも今も尚信仰を受けている訳でもない俺は、一度使つてしまえば靈力や妖力と違つて消費した分を回復する事がない……それで、他二つと比べると些こすれか密度や量に不安があるが、道具を媒体にして術を発動させる事が出来る靈力を使わざるを得なくなってしまった。

尤も、刀を設置するのはその密度や量を補う為で、刀の一本一本に前々から      具体的に言えば数千万年前ぐらいから、靈力を溜め込んでいたのだが……まあ、そんな事をしていたのも、大昔にデミュウルが、

『こんな事もあるうかと、つて感じでやつとくとええで！備えあれば憂い無しや！…』

なんて事をぬかしてたからなんだが、アイツ絶対にこの事見越してたよな。またか？またアカシックレコードか？……つて、今はアイツの事はどうでもいい、先に結界だ。

今回の結界、刀で描いた円を靈力を流すラインとして『固定』、そこに靈力を流し込んで円状の結界として形を『固定』する事により、枠組みである円に沿つて外と中を力尽くで物理的、靈的に遮断する仕組みになつている。ついでに、俺の能力による概念操作で結界自体を補強、刀に溜め込んでいる靈力は保険として結界が壊れそうになつた場合のブースター役として活用する。ブースターまで出すのは少しばかりやり過ぎ感もあるが、今回はそれぐらいしておかないと本当に結界が崩れかねない。

本当なら、俺の『肯定と否定を操る程度の能力』で結界の『崩壊』の概念だの何だのを『否定』さえすれば保険なんて必要ないんだが、残念な事に能力には限界がある。

いつかも言ったと思うが、俺の能力の本質は『世界の書き換え』。つまり自分の認識で現実を捻じ曲げる事が可能なのだ。例えば、在

るはずの無い物を『在る』と『認識』する事によって、本当にそれを作り出したり、本来在る物を『無い』と『認識』する事によって消し去つたりと、本当に便利……なのだが、完璧なの物なんぞこの世には無い。

能力つてのは、結局の所単純な力比べだ。どれだけ使いこなせるか熟練度と言い換えてもいいが、その一点が重要になつてくる。一見万能に見えても、使いこなせなきや意味がないだろ？

そして、相反する力がぶつかり合つた時、強い方が勝つのは当然の摂理。もう何度挑戦したかも覚えてないデミュウルへの挑戦の時、どんな概念を使っても当たらなかつたのも単純に能力の絶対値がアソツ自身よりも低かつたと言うのが原因だけあって、そこらへんは身に染みて実感しているさ。

そして今回、結界の中でやり合つのは八坂と諏訪子……片方ならまだ兎も角、両方同時となると『死』と『老い』に回して分以外の能力 約三割強を結界につき込んでも防げるかどうか……。

いざとなれば、『死』や『老い』に回して分も注ぎ込まなきやいけないかもなあ。正直、万が一の可能性として、八坂の部下共が暴れだす可能性もあるから、不死性は解除したくねえんだが。こつちは八坂に、「部下を犠牲にしないで済む」つて建前で一騎打ちを申し込んでるだけに、向こうに非があつたとしても殺しちまう訳にやいがんし、いくら『第三思考』があろうとも肉体のスペックを超えて動けるつて訳じやないからなあ。いや、その為の靈力のブースターなんだし、役に立つて貰わなきや困るんだが。

ああ、もつ色々と面倒臭い。面倒臭いが。

「まつ、何とかなるだろ」

楽観的にも程があるが、いくら考えても未来の事なんぞ俺にやあ分からん。俺に出来る事と言えば、精々必死こいて裏方に徹する事ぐ

らいだ。なら、俺はそれをやり切るだけだ。それが、俺がここにいる理由でもあるんだから……。

俺はそう結論付けてゴチャゴチャと頭に広げていた思考を打ち切りると、最後に設置した小刀に異常がない事を確認すると、諏訪子達がいるであろう母屋の方へと向け、歩き出した。

その日の夕飯は、今までにない程豪勢で、賑やかな物となつた。

猪だつたが、普段は祭事の時にしか出されない肉が振舞われ、三人共が羽目を外して それこそ、半ば下戸である穂波ですら酒を呷る程。たつた三人ではあつたが、豪く賑やかで楽しく、そのあまりにも楽し過ぎる夕餉は、まるで 。

「……ハツ、縁起でもねえな」

本当に縁起でもないと、そう口の中で呟いて、徳利を呷つた。

いつかの様に縁側で月を眺めながらの月見酒。前と違う所と言えば、酒の肴に周りで鳴く蟋蟀の声が追加されてる事位か……。

さつきまでの嫌な考えを打ち払つかの様に、もう一度徳利を呷る。

「つと、来たか」

後ろから近付いて来る気配を感じ取った俺がそちらへ視線を向けるのとほぼ同時に、

「隣、座るよ」

諏訪子はそう言つて、俺の返事も聞かないで俺のすぐ隣に腰掛けたかと思えば縁側から垂らした足をブラブラと揺らし始めた。ついでに、俺の徳利を奪つていくと言つおまけ付き。いつもの帽子は被つてないが、きっと部屋にでも置いているんだろう。わざわざ気にする程でもない。

「……おい」

「気にしない気にしない」

俺は半眼で諏訪子を睨み付けるが、諏訪子は何が楽しいのかケロケロと酒を飲みながら笑うばかり。……いや、いいんだけどさ、流石にそこまで傍若無人なのはどうりよ。と言つたか、穂波はどうした。

「布団に寝かせてきたよ。穂波つてば、相変わらず酒に弱いよねー」

「普段飲まねえからなあ……」

穂波の奴、宴会で賑やかに食事を取つていた時には問題なかつたのだが、諏訪子が折角だから、なんて言いながら酒を持ち出すと、早々に酔い潰れてしまった

つて、ちょっと待てよ。

「ひい、ふう、み……」

と、今日だけで消費された酒瓶の数を折り数えながら、頭の片隅で俺が飲んだ分と諏訪子が飲んだ分を計算して……三升ぐらいか？穂波が飲んだ分は。えつと、一升が約一・ハリットル程度だから……

#### …五・四リツトル？

前言撤回。人間でそれだけ飲めりや十分普通じやねえよ。むしろ、それ以上飲んだ上で、まだ飲もうとしている俺らもかなり異常だが……まあそこはほら、人外だからって事で一つ。

「つて、いい加減返せ。一遍に飲みすぎだ」

笑顔で徳利を傾け続けていた諏訪子から徳利を奪い返してみれば、そこにはもう随分と軽くなつてしまつた徳利が……。

「つて、マジで飲みすぎだろ！ 満杯だつたんだぞ！？」

そう言つても、諏訪子は何が楽しいのか笑つたまま。

（……何を言つても無駄、かあ）

そう悟つた俺は溜め息を一つと共に能力を発動して能力で徳利の中の酒を元に戻すと、再び重くなつた徳利に口を付けた。

諏訪子も一頻り笑うと満足したのか、二人しかいない縁側に沈黙が訪れる。決して重苦しい物ではない、柔らかな、居心地のいい沈黙。聞こえるのは蟋蟀の鳴き声だけ。そんな中で、二人とも何も言わず、ただただ空に浮かぶ中秋の月を見上げていた。

「「めんね」

どれほど時が経つだらうか。月を見上げたまま、ポツリと諏訪子が口を開いた。

「神同士の争いに巻き込んでやつて。……それと

わだしたう

「

ありがとう……。

そう言つた諭訪子を横田で伺えば、月明かりに照らされたその表情は、どうまでも穏やかで、だからだろうか、どこか不安を覚える様な

「……随分と、らしくねえなあ」

その感情を振り払おうと空に視線を戻しながら茶化す様に言えれば、「かもね」なんて本当にらしくない言葉が返つて来た所為で、思わず熱でもあるんじやないだろうな、と疑つてしまつた。

「……何?」

「いや熱でもあるのかと」

熱を測るつと額に手を当ててみたが、俺の言葉を聞いた途端に口を尖らせた諭訪子に払われてしまつた。

何だよ、眞面目に心配してたつて言つのに……分かった、分かったからそんな目で俺を見るな。

「ふん、何さ。折角私が眞面目な話してたつて言つのに……」

諭訪子の奴、どうにも拗ねてしまつた様で、俺から徳利を奪い取ると頬を膨らませたまま一気に呷り始めてしまつた。

少しばかり悪ふざけが過ぎたかなあと、そう思つて悪かつたよ、と苦笑いしながら諭訪子の頭をポンポンと軽く叩く。身長差の所為で、俺と諭訪子が横に並ぶと座つても頭が手を乗せるにちょうどいい具合の位置に来るのだ。いつも子供扱いするなとか何とか言つて振り払われるんだが、どうにも癖になつてしまつた様な気がする。

何と言つが、柔らかいんだよなあ、諏訪子の髪つて。……癖になる？つて言つのかねえ。女の子は皆こんなもんなのか……？

なんて事を考えていたのだが、気付けば今日に限つて諏訪子は俺の振り払わず、頭の上に手を乗せられたまま徳利を手に大人しくしている。……マジで大丈夫か、コイツ。

「実はね、私つてあんまり戦つた経験つてないのよ」

「……前に一度聞いたな、それ」

いつの祭りだつたか、酒に酔つた勢いで諏訪子が自分の昔話を披露してた事があつたのだ。尤も、そうだけ？なんて言つて首を捻つてる所を見るに、当の本人である諏訪子は覚えてない様だが……。

「あー、『今の信仰の大本はミシャグジ信仰であり、洩矢は後からそのミシャグジの統率者として神格化した』、だけ？」

もう数十年前になるだろう、うろ覚えの覚束ない記憶を探り出してみれば、諏訪子がそうそう、と相槌を打つ。

どう言つ経緯でそうなつたかは知らないが、聞いた話によれば諏訪子はそれなりの信仰を得ていたミシャグジから統率者、と言つ形で信仰を乗つ取つたそうだ。血が流れる事か否かの違いはあるだろうが、結局の所、諏訪子も今回の八坂と似た事を……と言つよりも、神つて言つ種族は多少の違いはあれどやつてる事は変わらないと言つ事だろう。いや、もしかしたら諏訪子の場合は今回の件と違つて、ミシャグジに抵抗すらさせなかつたと言つ点においては八坂よりもエグイのかも知れない。

「その後も、信仰は広がつていつたけど戦闘になる事は少なかつたし、戦闘になつた時も対等とは言い難かつた……。それだけミシャ

グジの信仰つて言つのは大きかったのよ

「へえ……」

それを聞いたのは初めてだな……つて、以前話を聞いた時には酔つてたし、俺も話半分に聞いてたつて。

「だから、私と対等の相手 負けるかもしれない相手つて、初めてなんだよ」

そう言つて、僅かにだが確かに表情を曇らせる諭訪子を、意外だと思つた。

コイツでも、こんな表情をするんだと。  
コイツでも、不安を感じる様な事があるんだと。

そんな顔をしている諭訪子を見ていた俺は、気付けば、えいっと言う氣の抜ける掛け声と共に、

諭訪子の頭に乗せていた右手で、その頭を叩いていた。

「あうひ？！」

いきなりの攻撃に虚を突かれた諭訪子は、頭だけでなく上半身毎のめり掛けてしまった様で、手をワタワタと動かしどうにか地面に落ちるのだけは回避して、ホツと一息を吐いたかと思えば、すぐさま俺に向かつて、何するんの！と頬を膨らませて分かり易く怒つてゐぞと言う視線を寄せす諭訪子に、そっちの方がらしく見えるのはどうなんだろうなあ、と苦笑いしつつも口を開く。

「何弱気になつてんだ、らしくもない」

「むっ」

フンッと鼻を鳴らしながらそう言つても、諏訪子は口を尖らせるだけで何も言わない。どうも、本人も自覚はしていたらしい。まあ、今までに経験した事もない様な大一番。それも対等かそれ以上の相手との命のやり取りだし、不安を感じるのも当然の事だらうが……まあ出来る事をやるつて言う方針は変わらないし、そう言つ不安を取り除くのも友人の役目つて事で一つ。あー、こう言つ頭使うのは苦手なんだが……。

「諏訪子、お前は何だ。洩矢の祭神、ミシヤグジの支配者だろ。何を弱気になつてやがる。自信を持てよ、お前は間違いなく土着神の頂点なんだからよ。……それに、いざとなれば

「

「ござとなれば？」

俺はそこで一度言葉を切ると、手に持つてゐる徳利に口を付て一口。どこか期待している様な視線を俺に向けつつ、言葉の続きを気に掛けている諏訪子に、ニヤリと口角を上げて精一杯の決め顔で、

「ござとなれば、穂波が何とかしてくれるだろ」

「…………」

沈黙は何よりも雄弁である、そんな言葉を今以上に実感した事はないんじゃなかろうか。と言づか、視線が物凄く冷たく感じるのは気のせいだと思いたいんだが……何だよ、その半眼は。

「いや普通さ、いついついつて『俺が何とかしてやる』っていつちのじやないの？」

どこぞそんな知識を付けて来たのかは知らんが  
俺だけ、そう言づの教えたのは。でもそう言づいつも、いつ  
ちの方が俺らしいと思つんだが。

「駄目な方向で凄く合つてると思つよ」

……あー、不味いな、どうも言葉と視線に棘がある。そんなにお氣に咎をなかつたんだろうか。と言づか、元気付け様として不機嫌にしてしまつ辺りにも俺らしさが出ていい氣がする。全く必要は無いが。

「まあ、最初から妖始なんかに頼る氣なんてないけど

諏訪子は軽く溜め息を吐きながらそう言づと、裸足のまま地面に足を付けた。そしてゆつくりと、足元確かめる様に、思わず目を細めてしまつ程の月明かりの下で、広く、僅かに花が咲いているだけの殺風景とも言える神社の庭の土に、足跡を残しながら、歩みを進めしていく。

何となくではあるが、さつきまでとは諏訪子の雰囲気が変わつている気がする。その所為でどうにも声を掛け難かったのだが、ちょうど諏訪子が庭の中程で立ち止まつた。

「諏訪子？」

それを皮切りに声を掛けようと名前を呼ぶが、当の諏訪子は何も答えず月を見上げている。

いつの間にか虫の声も止まり、俺達二人に感じているだけだろうが、何とも形容し辛い沈黙が流れしていく。諏訪子との沈黙程度、普段なら何ともないのだが、今の様に諏訪子が何をしたいのかがわからない様な時なんかには、僅かにだが、どうしても居心地悪さを感じてしまう。

「うん」

月を見上げたまま、何かを決めた様に括った様に一度頷けば、ふわりと短めのスカートを翻しながら振り返る。

「大丈夫だよ、絶対勝つから」

その時の諏訪子の表情には、陰りなんて物は存在せず、いつもの様に否、いつも以上に自信に満ちていて。もはや、何の憂いもないと言うかの様に、柔らかく微笑んでいた。

月明かりを背に佇む諏訪子は、その夜空に映える金色の髪も合わり、まるで一枚の絵画の様な美しさで。

例え、結果が敗北だと分かっていても信じたいと、そう思わせるには十分で……。

「ああ、信じてるよ」

俺は今度こそ、間違いなく精一杯の決め顔で、そう答えるのだった。

「ふう……」

徳利から口を離して一息吐く。

今、この縁側にいるのは俺一人だけ。諏訪子はついさっき寝ると言つて部屋に戻つたし、今頃は既に床に就いている事だろう。

そして一人になつた今、考える事はやはり明日の事だつた。

今回の一件、万が一<sup>イレギュラー</sup>がないとも言えないが、恐らくではあるが諏訪子は負けるだろう。俺が関わらない以上、そこに不確定要素は一切ない。一度辿つた道をなぞつて行くだけになるだろうと思う。

頭の片隅にあるのは、昼間に穂波に聞かされたいくつかの保険の中の一つ敗北を条件とした、諏訪子の生存の為だけに準備したらしい保険とも言えないお粗末な案。何せ敗北したにも関わらず生存させる為の策だ、上手く行けば多くの利が得られるが、確率は限りなく低い様に思える……って言つても、協力はするけど。一応、俺にも仕事があるみたいだし。

万が一が起きず、諏訪子が敗北する事になれば。

（まあ、その時は命ぐらい賭けるか……）

本来なら吹けば飛ぶ様な軽い人間の命だが、折角不死の体とセットなんだ。友人の為に使うのも、悪くないだろ。穂波の策だつて、死に物狂いでお膳立てしてやる。それでも上手く行かなかつたら、諏

訪子や穂波を連れて他国に逃げるのもいいだろ。それぐらいはやつてのけて見せるさ。

「まあ長い付き合いの友人の為だ、多少の無茶も、偶にはいいだろ……」

縁側に腰掛けたままだが、諷訪子がそうした様に、月を見上げる。腹は括つた。後はなるようになるだろうと、再び徳利に口を付けた。

夜が明ける。さあ、幾度となく繰り返されても結果の変わらない出来レースの幕開けだ。

## 狼と祟り神。決戦前夜の晩餐（後書き）

さて、前回の予告をぶつた切ってまたもや丸々一話説明文や会話文だけじざいます。上手い人ならもつと綺麗に説明文を盛り込むんだろうなー、と自分の力量のなさを嘆く羽目になつた作者の目だまです。

どうしてこんなに長くなつたんだろう、今回でバトル始まつてはすだつたのに・・・・。

<http://3409.mitemin.net/i31310/>

そして友人の描いてくれた妖始くん公開。友人の一存（主に面倒臭いと言う理由）でちょこちょこ変更されますが、大体こんな感じ。まあ顔は怖すぎるけどwww

次回、と言つたが今回の最後辺りから作者の中一病が炸裂。

じゃ、感想や質問、アドバイスがあればお気軽にどうぞ。勉強しろつていうツッコミは無粋だーー！

### 『一度限りの次回予告』

幕を開けよ。それは何度繰り返しても結果の変わらない出来レースだが、それは何よりも心躍る出来レースだ。何度も見たくなる演劇の様に。何度も見たくなる小説の様に。

最高の見せ場で最高の殺陣を。脇役は舞台袖へ。

並び立つは二人。方や土着神の頂点たる祟り神。方や勢力を爆発的に伸ばしている軍神。

これより先、二人の間に入る者はいない。

ラストに相応しく、華々しく飾つて魅せよう。

。

・・・・・あれ、これって逆に自分でハードル上げてないか?  
・・・・・き、期待せずにお待ちください!!

## 祟り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（前）（前書き）

長くなりそうだったし、もう一ヶ月放置しちゃつてるので投稿。暇潰しにツイッターとやらを始めたはいいものの、特に使い道がない浮かばず。登録その物が暇潰しでした（笑）

URL : <http://twitter.com/#!/media>  
ma89135

追記。妖始の服装について一切触れてなかつたのをつい忘れておりました。本編の方へ追加しておきますが、遡るのが面倒な方様にここにも載せておきます。

- ・白い広袖の着物に黒の袴。基本的には着物は襟元を緩ませており、袖に小さな黄色い羽根の装飾があしらつてある。旅人の守護天使であるラファエルの加護が施されているが、残念な事に効果は無い。足は素足に底に鉄板を仕込んだ下駄。

## 祟り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（前）

日は既に高く南中に近付き始めた頃、彼女は現れた。数十に及ぶ部下達を引き攣れて飛行し、威風堂々と胸を張りながら、彼女

八坂神奈子は洩矢神社へと現れた。

三日前に会い見えた時と変わらず、俺の貧弱な語彙じや説明の仕様が無い奇抜な髪形と服装。そして、以前には無かつたはずの、まるで軍艦の砲台かと見紛う様に背負つた四本の六角柱。その一本一本を形作つている、あまりにも膨大な神力が触れている訳でもないのにチリチリと俺の肌を焦がす。神力の浄化作用は俺が物ノ怪ものけに属するが故なのだが、それでも離れている相手まで浄化する程の神力なんて言う物は類を見ないのは言つまでもない。

本来ならその柱の背負い方などはソッコミ所のかも知れないが、残念ながら今回は俺の出番もおふざけも無しだ。まあそれでも言わせて貰えるならば、

「遅おせえ！！」

「それは時間を指定しなかつたそちらだらうが。私が知る物か

はい、全く以つてその通り。全部時間の指定を忘れていた俺の落ち度であるのだが……まさか昼前に来るとは思わなかつたんだよ。夜明けから待ち続けてぐつたりだぞ畜生。

はあ、と溜め息を一つ吐いて頭を搔きながら気持ちを切り替える。ここからはマジだ。真剣と書いてマジと読むぐらいマジだ。

「洩矢は」

「いひちだ」

案内するのは当然昨日下準備を済ませておいた広大な森。既に諏訪子も待機している。

普段はそれなりの賑わいを見せているにも拘らず、今日ばかりは静寂に包まれている境内の中、人数分の足音が響く。

俺と諏訪子がよく使っていた縁側を抜けて神社の裏手に出れば、そこにあるのは境界線。結界の、内と外を隔てる俺の線。

「最後に確認しておく。ここより先に進むのは八坂神奈子一人」

「ああ。他の奴等はここで見物させておくぞ」

「開始の合図は特に設けない。強いて言つなら、俺が結界を張つてからだ」

「精々頑丈な物を用意しろよ、妖怪」

最後に軽口を叩く八坂に恐れは無く、そこにあるのは絶対的な自信のみ。

（さてここからはテメエの仕事だぞ、諏訪子……）

願うは諏訪子の勝利。確信するは諏訪子の敗北。その矛盾する二つの思いを抱きながら、俺は八坂が境界の中に入るのを見届け、結界を張る為の靈力を線に流し込んだ。

八坂神奈子が境界を越えるのと、結界が張られるのに殆どタイムラグはなかつた。

妖始によって流し込まれた靈力が牙から牙へと駆け巡り、刻まれた術式に従つて不可視の壁を形成するまでの間は僅かに一瞬。その発動速度は勿論の事、三十八の牙によつて『固定』される事で強度も申し分無く、それには神奈子も思わず舌を巻く程の物だ。元より神奈子自身も、一大勢力の主神である諏訪子が何の理由も無く妖怪を手元に置くとは微塵も思つてなかつたのだが

それでも、神奈子にとつては、妖始がここまで出来ると言つのが予想外だつたのだ。

確かに、妖始が膨大な妖力を隠しているのに気付いてはいた。気付いてはいたが、神奈子が感じたのはそれだけだ。

才を見抜く事は神靈にとつて当たり前の技術ではあるが、その中でも少なからず自負心を持ち、それを武器の一つとしていた神奈子にとつて、何の才覚も見受けらない妖始は、ただただ膨大な力を持つただけの、それに振り回される、身に合わぬ袈裟を着た凡夫にしか感じられなかつた。だと言うのに、いくら補助があるとは言えこのレベルの結界を張つて見せる

それは、妖始が神奈子の印象に反して、想像し難い程長い時間の中を生きてきた事を察させるのに、十分な物となりえた。

( 少しばかり見誤つたが……契約を破る事はあるまい )

今はそんな事を気にしてもしうがない。そう考えて神奈子は、ならば、目の前の戦いに集中するだけだ、と眼前に広がる森を見据える。

既に神奈子の優先順位は結界を張つた妖始から諏訪子へと切り替え

られている。今の所、神奈子には諏訪子が何か仕掛けた様には感じられない。

先程までの僅かな間を隙と言えるかは微妙だったが、仕掛けの機会があつたのは間違いないだろう。

（何も仕掛けで来ないのは慎重になっているからか、それとも既に仕掛けられているが私が気付いてないだけか……）

恐らく、前者だろうと神奈子は考える。何か変化があれば、気付かない筈がない、と。

そして更に一步、森へと近付いた時

地面が沈み込んだ。

「なつ  
！？」

余りに予想外の事態に神奈子は驚愕する。

泥沼に踏み込んだかの様に、右足が抵抗無くズブズブと音を立てて地面に飲み込まれ、右足を引き抜くより早くそれは瞬く間に広がり左足までも飲み込んでしまう。

八坂神奈子の勘違いはただ一つ そもそも、諏訪子には先んじて何かを仕掛けておく必要などないと言つ、ただそれだけの事だ。

『坤を創造する程度の能力』。坤とは則ち『地』。無から大地を生み出し、自在に操る それが洩矢諏訪子の持つ、地に宿り長い間を共にしてきた土着神の頂点足り得るの能力。

彼女にとつて大地は一つの例外もなく彼女の支配下であり、更にこの諏訪は彼女の箱庭だ。 仕掛と言つのなら、常に仕掛けられている。

地を踏む振動は諏訪子に居場所を伝え、神奈子が一步田を踏み込むと同時に地の密度を低く、そして低くなつた所へ上から密度の高い地を流す 察知も回避も出来る筈がない絶対の罠。

既に神奈子の脚は太もも辺りまで飲み込まれ僅かに動かす事すら困

難となつてゐる。

「チツ

「……」

捕られた獲物を更に深く地の底へと引き摺り込まんとするそれから舌打ち混じりに空へと抜け出す。踏み込みが必要となる跳躍ではなく、浮遊や飛翔の類で、洩矢神社に訪れた時と同じ様に宙へと飛ぶ。地で身動きが取れないならば空へ。それは空を飛べる者にとつては当然の思考であり、地に居座り続けるそれからの唯一の逃げ道である。故に、その考えは至極読み易く。

宙へ飛び上がつた神奈子の視界に与つたのは、突き抜ける様な青の中の、シミの様に黒い、間違ひ無く狙い済まし用意されていた鎌の如き無数の巖。

そして

巖は矢となり衝撃を撒き散らし、砂の粉塵が辺り一面に立ち上る。巖はどれも必殺の威力を誇る文字通り神技。だがそれでも尚、身を潜めている諭訪子は決着だとは思つていい。

確かに諭訪子の罠と巖、それらはいずれも神掛かつた最高のタイミングだつたが、忘れること無かれ。神奈子も諭訪子とほぼ同格、それも戦を本領とする軍神と称される神靈である事を……。

「……？」

彼女の見上げる視線の先、未だに立ち上り続けている粉塵に感じた不自然さ。

(あれ、長過ぎない……?)

既に一分近い時間が流れようとしているのに、粉塵は收まらずに宙に浮き続け その形を、上空で球体へと変え始めた。

「…………

それと同時に結界内に吹き抜ける突風。砂を巻き上げたそれから、諏訪子は顔を庇う様に袖を翳す。その風が收まり、諏訪子が腕を顔から外して見上げれば、さつきまで球体を作っていた粉塵はなくそこには、傷一つない神奈子が立っていた。何事もなかつたかの様に、堂々たる様で。その体に、幾重にも重なり複雑に絡み合つ風の衣を纏つて。

「…………

無言。神奈子は何も言わず、ただただ眼下に広がる森を見下ろし僅かに、口元を緩めた。その笑みは、自分と対等以上に戦える者を見付けたが故か、はたまた別の意味があるのかそれは本人にしか分からず、それ以上理由を推測するよりも先に抑え切れずに零れた笑みはすぐに表情から消えてしまう。

神奈子は右手を無作為に突き出し、指先で小さな円を描き始める。まるで、何かを書き混ぜるかの様にゆっくりと、しかし一周、二周と、徐々に描かれる円は大きく、速くなり 気付けば、結界の中を風が吹いていた。不可視の壁に覆われているにも関わらず、確かに。

神奈子の指の、手の、腕の動きに合わせて、徐々に激しく、徐々に速く。

葉を揺らすだけだった微風<sup>そよかぜ</sup>は、木々を揺らす烈風<sup>れつぱう</sup>へと姿を変え、土を巻き上げるだけだった旋風<sup>つむじかぜ</sup>は、森を根こそぎ蹂躪する竜巻へと豹変する！！

僅かに十数秒。たったそれだけの時間で、広大な森は一掃された。根こそぎ、草すら残さず 荒れ地へと変えられてしまつた。

『乾を創造する程度の能力』。乾とは則ち『天』。天を支配するその能力は、気流だけに止まらず、天候すらも意のままであり

信仰を侵略で広げてきたが故に軍神と称されるが、その本質は間違ひ無く風神である八坂神奈子に、これ以上なく相応しい能力だと言える。

そして、その風神の猛威が存分に振るわれ荒れ地となつた森のほぼ中心地。周囲のあらゆる物が存在する事を許されず吹き飛ばされた筈のそこには、いくつもの岩を積み上げて造られた酷く目立つドームの様な物体が鎮座していた。

「無茶苦茶ね、まったく……」

次いで、竜巻が消えたのを感知したのかドームを構築している岩が崩れる。中からは現れたのは当然だが、辺りを見渡して呆れた様子の諏訪子。そして空に浮かぶ神奈子を一瞥すると、すぐさま予兆無しで創造した新たな岩石を打ち出す。

大地から放たれた神奈子を撃ち抜かんと迫る岩の弾幕を前に、神奈子は動かず

残像を作り出しながら神奈子へと一直線に

疾走する岩が彼女の体を貫く直前、その軌道がぶれた。

神奈子は動けないのではなく、動かない

く、一見すれば先の岩の軌道は物理法則に反した現象だが、その異常には、異常なりの法則が存在する。

確かに、諏訪子はあの攻撃で仕留められるとは微塵も思つていなかつた。それでも、回避されようが迎撃されようが、手傷を負わせる程度は可能な攻撃だつたはずなのだ。それを無傷でやり過ごされたならば、そのタネは早々に見破つておかなければならぬ。

放つた飛礫はその法則を看破する為の仕掛けを解き明かす為の攻撃だつたのである。

巖を回避した神奈子

「ふうん……風で軌道をずらしてんのだ。さっきのを避けたのもその風つて訳ね」

「クツクツ……早いな、たつた一回で見破るか」

そして、諏訪子の目論見を理解しておきながら、神奈子はあえてそれを回避せずに大人しく受けたのだ。諏訪子を試す為に。何度目でタネに気付く事が出来るか、それを試す為に。

「クツクツク……」

故に神奈子は笑う。諏訪子が自らの予想を裏切つて僅か一回でそのタネに気付いた事に、この相手は、全力でやつてもよさそうだと。

「フフフ……」

それを受けて諏訪子も笑みを浮かべる。目の前の相手が、何の遠慮手加減もなく全力で叩き潰すべき相手だと、初戦の相手に相応しい相手だと。

戦闘を始めて既に十数分経過して、初めて二人は真正面から対峙する。

天に住まう八坂神奈子と地に根付く洩矢諏訪子。

『乾』と『坤』、『天』と『地』。

『大和の柱』と『土着神の頂点』

『風神』と『祟り神』。

その姿形やあり方、そのいづれをとってもあまりに対照的な二人。場を耳が痛くなる様な静寂が支配する中で、二人は互いに何も言わず、ただただ睨み合う。

双方、通常であれば既に動く所が存在を保つ事すら困難になる様な莫大な力を使用したにも関わらず、汗はおろか呼吸すらも乱してい

ない。それはつまり、あれだけの事を為しておいて、それでもこの二人にとつてはただの様子見に過ぎないと言つ事だ。

だが、それももう終わる。既に先程のやり取りで、一人は自らの中にあつたイメージと実際の戦力との誤差修正を終了した。

ならば、これ以上の様子見は不要。後は全力で相手を叩き潰すだけだ。

あまりに異常で、あまりに非常識。人智なんて物が及ぶ範囲を遥かに超える、たつた一柱の神による戦争が、始まる。

## 祟り神と風神。始まる大戦。狼は蚊帳の外（前）（後書き）

今回のお題は「三人称でどこまでバトルを描写できるか」と「原作キャラを格好良く書きたい」の二つ。

サブタイの（前？）は後どれくらい掛かるか分からぬから。さすがに（中）はないと信じたい。

文章力向上の為、感想や注意点などありましたらドンドンお寄せください。

八坂サマの能力の内容に関しては作者の妄想なので、注意を。原作で使われた事はないんじゃないかなー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7842n/>

---

東方否意狼

2011年11月12日23時21分発行